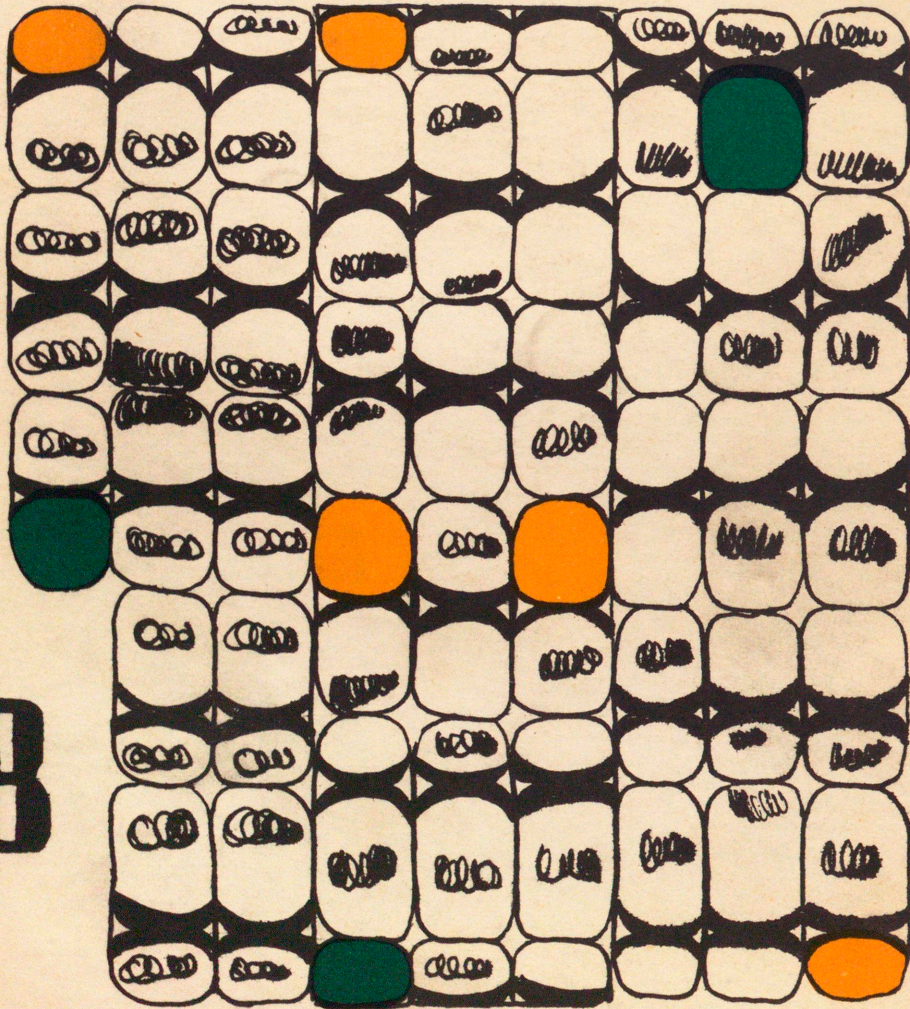


ふんま



8

東京農大畜友会

表紙のことば

家畜繁殖学研究室三年

岡本和夫

マッスに圧倒され、埋れた暗やみの中で、様々な生活が折り重なる。それが、人間の造り出した疎外というものであるなら、僕はマッスという怪物になんらかの意味で抵抗を試みたい。

東京農業大学畜友会

家畜

## 卷頭言

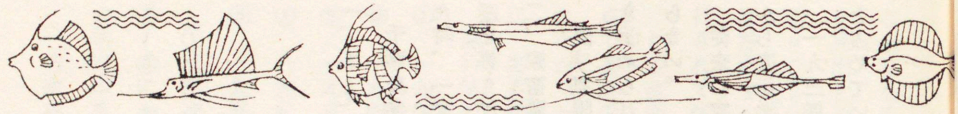
畜友会委員長 中山 精

「ふじみの」も、今回で八号を数えるに至った。その間、学生の数も増して、現在では五百名を優に越す大所帯となった。同じ畜産学科に学びながら、互に名前も知らずに卒業する者も出てきた訳である。当然、先輩と後輩との結合関係も弱くなり、日常生活は益々集団からの離脱の方向におもむき、学内においてもこの傾向は否めなす。

人は強制されるものに反撥を感じて、自らの意志を尊重する。思索し、沈思して意志を築く、たとえそれが、感情的なものから発している、結果において、他の超越、自己の確立となる。そこに、一人の人間の誕生があり、人間としての責務が生じるのである。

社会は確かに規制を必要とするが、個人の自由を侵害する強制処置は人間性への不信頼であり、協調性を尊ぶ社会に敵対するものである。人間が社会的な動物である以上、内的な意志は外的な意志を一致すべき筈のものである。しかし、これは集団が大きくなるにつれ、個人の均質化を招きその存在は他を離れることによる仮その確立に過ぎない可能性が大きい。

このような矛盾した現状を打破できるのは、我々の世代であり、エネルギーを生命力なくしては不可能のものであろう。常に前向の姿勢で、逃避を考えず行動して初めて現在の複雑な機構における個人の価値が存在していると思われてならない。



ふじみの 第八号 目次

巻頭言	.....	畜友会委員長	中山	1
本邦における家畜繁殖学の歩み	.....	農学部長	平林	4
北ボルネオに旅して	.....	学部長	鈴木	8
畜産と動物用医薬品の動向	.....	教授	川島	9
解卵から発展へ	.....	教授	砂川	14
「サンバギータ」	.....	教授	一戸	15
雑感	.....	助教	杉村	18
パラグアイとガウチョと	.....	助教	伊藤	19
フィリピンで見た家畜	.....	助講	石島	25
雑感	.....	手師	芳郎	25
新入生諸君へ	.....	三年	奥泉	28
夏期実習をして	.....	一年	仁一	28
詩				
告別	.....	二年	かがやみのる	32
無題	.....	二年	I・K生	33
孤独	.....	二年	M・E生	34
反歌	.....	二年	かがやみのる	35
中間的学生	.....		S・T生	36

特別寄稿

「屋久島の思い出」	.....	林学科三年	梅田	37
随想				
農大生一年のある日々の記録	.....	二年	豪崎	39
一言申す	.....	二年	米倉	41
学生生活	.....	二年	義義	43
(経堂・新宿)	.....	三年	中島	44
健全思想について	.....	三年	折田	45
「へびの話」	.....	二年	木村	49
Collegeの毛色の遺伝について	.....		昭雄	49

研究室便り

家畜衛生学研究室	.....	53	家畜飼養学研究室	.....	54
家畜繁殖学研究室	.....	53	肉利用学研究室	.....	55
家畜経営学研究室	.....	54	乳利用学研究室	.....	56

昭和四十二年卒業論文一覧表	.....	57
東京農業大学畜産学科畜友会規定	.....	61
編集後記	.....	64

# 本邦における家畜繁殖学の歩み

教授 平 林 忠

## 一、まえがき

千葉農学部畜産学研究室が発展的に解消して、家畜繁殖学と家畜育種学の二つの研究室に分離独立することになった時、「家畜繁殖学の歩み」と題する一文を研究室報に掲載してから十数年の歳月が経過した。そこで、その後の変遷を書き加えて、畜産学徒の参考に供する次第である。

## 二、家畜蕃殖学から繁殖学へ

漢字制限によって「蕃」という字が当用語のランクから抹消されて以来、使われなくなった家畜蕃殖学も家畜繁殖学と書き改められたのは止得ないことである。とはいえその用語の意義内容にも変化をきたしつつあることに注意せねばならぬ。

従来の家畜蕃殖学においては家畜の数を増加するだけでなく、その質を改良するという意味を含んでいたのであるから遺伝学と生殖生理学とを基盤とする学の大系に立脚して畜産学の中心にその座を占めていた。

一九三四年芝田清吾博士がその著「畜産学原論」の序文の一節に「家畜蕃殖学と家畜飼養学とは畜産学の中心の座を占めている。然るに飼養学に関する成書の出版はすでに数種を算えるにわかかわらず、蕃殖学は独り本邦に皆無なる

のみでなく、之を海外に求むるも僅かに Kronacher の [Züchtungslehre] (1929) を除くは適當なものを見出せぬ状態である。……(中略)蕃殖学は遺伝学と生殖生理学とで合成されるから、其の意味で Crew の [Animal Genetics] (1925) と Marshall の [Physiology of reproduction] (1922) とは共に推薦すべき良書なるも、それを一つに纏めた内容を有し直に畜産学徒の参考に資する程度のもは英米にも未だ発行されて居らぬ……(後略)」と述べ、ほほえみを以て、本書を江湖に送り出されたのである。

この畜産学原論には家畜飼養学を含んでいないから、正に家畜蕃殖学といひ得る著書であつて、その内容の豊富な点で畜産学徒のよい羅針盤となったといつても過言でない名著である。その後久しく此の方面に関する著書は出版されなかつたが、戦后二十有余年の間に次の数氏の執筆による家畜繁殖学が誕生した。

## 三、家畜繁殖学に関する著書一覧

発行年次	著者	著書名	発行年次	著者	著書名
① 一九四六	芝田 清吾	新畜産学原論(増補改訂)	⑥ 一九五八	柏原 孝夫	家畜繁殖学
② 一九四八	西田 周作	家畜蕃殖学	⑦ 一九五九	加藤・星	家畜繁殖講座
③ 一九五三	佐藤・星	家畜臨床繁殖学	⑧ 一九六六	Haten(西川 訳)	家畜家禽繁殖学
④ 一九五六	竹内 三郎	家畜繁殖学	⑨ 一九六七	加藤・星	家畜臨床繁殖学(改訂)
⑤ 一九五七	家畜繁殖研究会	家畜繁殖学			

①は前述の畜産学原論の増補改訂十版であり、②と④は従来の学的体系を備えている著書である。しかるに③及び⑤⑦⑨においては育種改良の分野を省略して生殖生理特に人工授精や性ホルモンの分野を多分に盛込んでいて、従来

の学的体系と変わっていることに気付かれるであろう。

一方家畜の改良面においては遺伝学や推計学を基盤とする育種の分野だけを取纏めた家畜育種学の著書が相次で刊

行された。

発行年次	著者	著書名	発行年次	著者	著書名
① 一九四九	羽部 義孝	家畜改良学とその応用	④ 一九五八	近藤 恭司	家畜育種学
② 一九五三	佐々木・内藤	家畜育種学	⑤ 一九六二	内藤 元男	家畜の育種
③ 一九五六	西田 周作	家畜育種要論	⑥ 一九六六	内藤 元男	家畜の育種(訂正版)

かように家畜蕃殖学は家畜蕃殖学と家畜育種学の二つに分離独立した。このことは両学問が近年めざましい進歩発展をとげた結果であり、また基盤となる学問の性格的差異から生じた必然的結果でもあって、あえて怪むに足りない。しかしこの二つの学問が畜産学と獣医学とにそれぞれ分離所属するとの見解をもつもののあることは当を得ない。二つとも畜産学に所属し、その構成のおもな四本柱となるべきものであって、両者の要の軽重を問うべき筋合のものでもない。あだかも車の両輪の如く或は楯の表裏のような関連において存立し進歩発展すべきものと考えている。

四、畜産学科の講座数

本邦で畜産学科を設置した十七大学について、その学科の講座に繁殖学と育種学とがどんな割合で織込まれているか調べたところ、次の表の通り、繁殖学と育種学を分離して二講座を設置している大学は九ヶ所、一講座の大学が八ヶ所、その一講座の内訳をみると、繁殖・育種学と一本にしているもの四ヶ所、育種学だけのもの三ヶ所、繁殖学だけのもの一ヶ所となっていて、いまだ分化のすすんでいない大学が四分の一あることが明らかとなった。

大学名	畜産学科講座総数	繁殖・育種学講座数	講座名	大学名	畜産学科講座総数	繁殖・育種学講座数	講座名
北海道大学	四	一	育種学	東北大学	七	二	繁殖学・育種学
岩手大学	四	一	改良学	茨城大学	五	一	繁殖・育種学

宇都宮大学	四	一	繁殖・育種学	宮崎大学	六	二	繁殖学・育種学
新潟大学	四	一	繁殖学	鹿児島大学	五	二	繁殖学・育種学
信州大学	四	一	育種・繁殖学	兵庫大学	四	二	繁殖学・育種学
名古屋大学	五	二	繁殖学・育種学	北里大学	五	一	育種学
岡山大学	五	二	繁殖学・育種学	東京農業大学	六	二	繁殖学・育種学
広島大学	六	一	繁殖・育種学	日本大学	六	二	繁殖学・育種学
九州大学	四	二	畜産学第一及び第二				

五、むすび

漢字制限を契機として、家畜蕃殖学が家畜繁殖学と改名され、狭義となったその内容は家畜の雌性・性の成熟・発情・交尾・受精・妊娠・分娩及び育成につらなる一連の諸現象を取扱い、さらに人工受精・人工妊娠及び性の人為的支配へと攻究の歩が展開されているので、これが基盤となる学問について、解剖学→組織学→生理学→内分泌学→生化学などと、その性格が次第に化学的色彩へと移行しつつあることを否むわけにいかぬ足取りを辿っている。

# 北ボルネオに旅して

学科長 鈴木 正三

昭和四十三年三月十日より同月十八日まで北ボルネオのSabah州を畜産的に見る機会に接した。Sabah州は現在ブー半島のMalaya連邦とSarawak州と共にMalaysia国を形成して居る。Malaysiaの首都はKuala Lumpurである。Sabah州は北海道と殆んど同じ面積で人口五十万といわれている。人種は主として都会労働に服する馬來人、この国の商業資本の八〇%をしめ会社、団体の経営的指導権を握る中国人、官庁、農場に働く英国人商人、労働者として働く印度人その他出稼ぎの労働者のフィリッピン人、インドネシア人など民族的に複雑である。またこの国の主な宗教はキリスト教、回教である。

筆者はSabah州Tawau県Tahad Datu郡のDarvel湾に入るSabah河の河口より西方八Km遊行した地域を踏査した。この地域は大部分が三〇m以上の原生林の所謂ジャングルの密林地帯でその傾斜は一部を除き15°20°の高原地帯である。気温は年間23〜31°C、平均25°Cで、年間降雨量は約二、〇〇〇mmといわれる。水系は比較的水量豊富である。草生は殆んど常緑樹の樹間に繁茂する蔓生植物であつて、密林地帯であるため草生は寧ろ不良である。

社会経済的背景としては現在Malaysiaの農業政策は米の増産、ゴムの品種改良、果樹園芸の振興、地力の維持、農業の多面経営に重点が置かれ、特に農業の多面化は畜産振興へと進展して来た。これがためMalayaでは二八〇〇万ドル、Sarawakでは三七〇万ドル、Sabahでは二一〇万ドルの経費が充たされ、家畜の育種に関する試験

研究、家畜の防疫衛生に対する処置、家畜生産技術の指導、牧野の設定など各種の畜産振興策が構ぜられ、国立のAnimal Production Institute Animal Husbandry Station が新設または増設され、また技術の末端への普及機関の設定も計画されている。そして対象家畜としてはまず肉牛、次に山羊、鶏が主要家畜に置かれ、豚は国民の宗教性により比較的軽視されている傾向にある。Sabah州政府の報告(一九六五)によれば肉用としての屠殺頭数は水牛では約六、五〇〇頭、その他の牛約一、〇〇〇頭、豚約四二、〇〇〇頭となっている。家畜の飼養頭数はインド牛、黄牛これらの雑種一八、〇〇〇頭、水牛八〇、〇〇〇頭、豚は在来種、パークシヤ種の雑種九八、〇〇〇頭である。在来山羊はこの地域での重要な肉資源となっている。鶏は約七六、〇〇〇羽の初生雛が輸入され、漸次この国の動物蛋白の給源として企業的養鶏が盛んになりつつある。

しかしながらこの地域での畜産技術の水準は遺憾ながら非常に低く今なお全く自然のままの文字通り原始畜産の域を脱し切れず、畜産資源は未開発の状態に眠っている状況である。現在畜産指導機関は大部分英領時代の名残りとして英国人技術者によって運営されているが、総てその指導性に積極性を欠いている嫌いも感ぜられる。従つて現地農民の日本の技術者に依存期待する点が洵に大きいものがある。

一方、Malaysiaを含む東南アジア地域は一部高冷地域を除き一般に国民の栄養食品であるべき牛乳の生産条件はよくない。即ち高温のため乳牛飼養管理並びに生産乳処理加工に対して必ずしも良い条件とは言いがたい。しかし今般踏査した地域は高冷地のため斯る酪農の可能性も具備しているものと考えられる。

要するに以上の様な自然的社会的背景からこの踏査地域はMalaysiaの主要家畜である肉牛生産の天恵の地と考えられる。肉牛生産現物の設定にはまず現有密生原生林の伐採が急務であり、牧野の設定が必要である。幸いこの地域は高冷地にして、南洋特有の強烈な日照と一日数回に及ぶスコールとは若干の人工を加えれば肥沃な草生の期待は可能にして、自然的環境条件と相俟ち各種獣疫から隔離された全くの無汚染地帯でもあり、当面の問題としては肉用牛生産基地としてMalaysia国の畜産開発の拠点たるべき地域であり、この国の産業は農業によって発展されるべきものであり、この国の農業は畜産によって主導されるべきものである。大いに学生諸君の関心と発展を望む。

## 畜産と動物用医薬品の動向

畜産学科 川 島 秀 夫

わが国の畜産はまことに目覚ましい発展を遂げつゝあるが、これにつれて動物用医薬品も著しく進展し、その量においても、またその種類においても多種多様のものが大量生産されるようになり飛躍的な伸びを示している。これは利用者側である家畜飼養農家の家畜衛生に対しての認識が深まつことによるものであるが、それにも増して畜産を推進する上に欠くことの出来ない因子としての必要性が生じたことを如実に示すものであって今後益々その重要性は高まるものと思われる。

そもそも動物薬の動向は、畜産のそれと一致し、畜産の趨勢は、すぐこれに直結する家畜衛生あるいは動物薬に反映するものである。

戦後から現在にかけてのわが国における畜産の動向をかえりみると、戦前の家畜頭数は戦争による国家財政の

逼迫と飼料の欠乏から未曾有の減少をきたした。従って戦争直後の畜産の重点はまず家畜頭数の増産におかれたといつてよい。

しかるに現在では馬を除くすべての家畜は戦前に上廻る頭羽数を確保することができ、また最近の畜産事業の形態が企業的大規模経営に切り換えられ、従って家畜の飼養形態も以前の少数飼育から多頭飼育あるいは集団飼育に移りつゝあるため家畜の飼養頭羽数は年々増加の一途を辿りつゝある現状である。このように一応家畜の増産が軌道に乗った現在の畜産の方向は次第に家畜の数的増産に代つて、質的増産すなわち乳、肉、卵などの生産物の増産確保に向けられてきた。家畜頭数の推移は表1に示す通りである。

従つてこのような畜産の情勢下において、家畜衛生の

分野もこれに伴つて色々の変遷があつたわけで、戦前の家畜衛生は主として伝染病の防疫という極めて消極的な増産対策であつたため動物薬の応用も専ら生物学的製剤（予防液、血清、診断液）に偏しておつた嫌いがあつた。しかし戦後は従来の家畜防疫という消極的な対策に加えて、積極的な家畜の増産に直結する施策として空胎防除、繁殖障害除去更に人工授精事業がおこり、ここに抗生物質、サルファ剤を主剤とする子宮内膜炎治療剤その他各種のホルモン剤が極めて広くかつ大量使用されるようになった。また疾病についても伝染病のみならず、消耗性疾患である寄生虫病の予防治療についても伝染病予防対策の一環として取り上げられ、牛の肝蛭や豚、鶏の蛔虫、糸虫などに対する新しい駆虫剤が次々に生産せられるようになった。

以上のように戦争直後の家畜衛生は専ら家畜頭羽数の増産に直結する衛生施策がおこなわれたわけで、動物薬もこれにそくした製剤が多く作られた。この時期にはホルモン剤、子宮内膜炎治療剤、人工授精用精液稀釈液などが大量生産された。

しかし一応家畜数も確保された今日の畜産の方向は、これら家畜から生産される畜産物の増産にむけられてきたわけで、この生産性向上に関連して、これまで殆んどかえりみられなかつた栄養障害除去という広い分野に亘つても研究が進められ、現在は生産性向上のための保健衛生面が特に重視されるようになった。

従つてこれらの目的に応用する各種の薬剤が使用されるようになり、ビタミン剤、ミネラル剤などの保健栄養剤や飼料効率の増進、発育促進あるいは病気の予防を目的とする各種の抗生物質飼料添加剤および各種の予防剤など各種の製品が大量生産されかつ広く一般に愛用されるようになった。その利用の方法は飼料工場で、飼料に混合され所謂配合飼料としてあるいは農家自身が自家混入の形で広く一般に使用されその生産量も極めて大きい。この利用度の増加は農林省動物医薬品検査所における抗生物質製剤の国家検定件数の年次別の推移をみることによつても覗い知ることができる。抗生物質製剤には飼料添加剤、注入剤、挿入剤、経口投与剤、注射剤とあるが検定件数の約半数は飼料添加剤である。



表2 動物用医薬品の分類別生産販売高

分類別	年次	生産高	販売高	品名
神経に作用する 医薬品	昭32	28,952,120 <sup>9</sup>	31,507,342 <sup>円</sup>	全身麻酔剤 局所麻酔剤 解熱鎮痛剤 抗ヒスタミン剤
	〃37	38,469,000	41,359,000	
	〃42		64,999,000	
循環器,呼吸器 泌尿器に作用 する薬品	〃32	119,608,305	127,435,322	強心剤 利尿剤 輸血用薬剤 鎮咳
	〃37	16,692,000	18,891,000	
	〃42		15,309,000	
消化器に作用 する薬品	〃32	57,829,930	74,668,244	健胃消化剤 整腸剤 利胆剤
	〃37	133,401,000	167,598,000	
	〃42		201,843,000	
繁殖に応用 する薬品	〃32			胎盤性性腺 刺戟ホルモン 卵胞ホルモン 血清性性腺 刺戟ホルモン
	〃37	381,197,000	410,353,000	
	〃41		153,176,000	
代謝性の薬品	〃32	791,835,044	1,017,531,478	ビタミン剤,カル シューム剤,およ び無機塩類 骨軟症治療剤
	〃37	1,398,862,000	2,000,251,000	
	〃42		4,959,812,000	
外皮用の薬品	〃32	22,393,496	25,820,864	
	〃37	60,161,000	67,775,000	
	〃41		171,345,000	
病原微生物及び 寄生性生物に作用 する医薬品	〃32	919,510,982	884,619,798	抗生物質 サルファ剤 駆虫剤
	〃37	870,095,000	1,073,915,000	
	〃41		4,365,291,000	
生物学的製剤	〃32	49,767,273		予防液 血清 診断液類
	〃37	831,647,000		
	〃41		2,487,999,000	
治療と目的と しない医薬品	〃32	389,314,000	592,459,000	飼料添加剤 殺虫剤 忌避剤 診断用剤
	〃37	1,418,007,000	1,577,266,000	
	〃41		1,125,581,000	

抗生物質製剤国家検定件数の推移

年次	昭
35	663
36	883
37	536
38	937
39	1,332
40	1,784
41	2,077

ところが畜産経営が現今更に急速に企業的大規模経営に伸展した関係で、従来の家畜衛生特に病気対策についてのあり方にも一転換を余儀なくせられるようになってきた。即ち従来の家畜防疫の推進の主体は国あるいは県に在ったのであるが、現在のような畜産形態においては国あるいは県が全面的に責任を以って面倒をみることは不可能となってきた。従って防疫の主体はどうしても飼養家自体の自主的、自衛的措置によらねばならぬことになった。今後各種の病気の発生予防あるいは蔓延防止の手段は飼養家自体の自覚と積極的な推進にまたねばならなくなった。この傾向は動物薬にも反映し、急激に各種の動物薬の生産量の増加をきたしている。

以上のような情勢下にある畜産経営においては物業の

利用発展は一層著しいものがあると予想される。表2に過去における動物薬の生産並に販売高を示した。

表1 家畜頭数の推移

	昭25	昭36	昭41
乳用牛	198千頭	884千頭	1,310千頭
役用牛	2,252	2,313	1,577
馬	1,071	618	269
豚	608	2,608	5,160
にわとり	16,545	71,806	250,000

## 解明から発展へ

畜産学科畜産経営学研究室

砂 川 泰 夫

畜産という、これからの人間生活に、重要な食糧供給の役割を占める産業に、関連する吾々学徒は、四ヶ年の学生生活において、みっちり、その基礎学なり、応用学なりを習得する必要があることは、いうまでもなく、そうした意気込みで、畜産学を学ぶために、栄えある畜産学科に入学されたものと考えます。

いまや畜産が、撰択の拡大と、その収益性の高さから、あるいは経営規模の拡大性から、時代的脚光を浴びてはいますが、そのいずれもは、明日の学問的解明と、創造からくる将来への発展要因というものを介在しなくては、畜産の発展はありえません。

畜産事業が、技術の上昇に伴って、学問的にも、また実際の経営面、応用面においても発展過程をすゝみつつあることは、それらの時点における、他の要求要因の影響に、併進した結果であることは云うまでもありません。学問も、技術も、時代の推移と共に発展するんだと云っても、それは偶発的な発展以外には、極く地味な向上

成果しか当らないのが普通であります。

すべての事業が、産業が、長期的な観測と、緻密な生産計画と、それらを具体化するための学問的研究、技術開発が、セコンドの刻みと共に進展しつゝあることを想起するとき、畜産それ自体の前時代的性格に溺れていることを残念に存じます。

勿論、新しい畜産技術も、それを裏付とする畜産学も、すべては日頃の研鑽によるものであって、偶然の発見、成功は、ないとはいえませんが、常に専門的知識の上に、輝かしい成果を掴むことができるということを知るべきです。

そして、畜産技術の学問的解明を基礎に、時代に一步前進した発展へのブラニングと、その成果を掴むことこそ、吾々畜産人に課せられた、生涯の使命であると、認識しております。

## 「サンパギータ」

助教授 一 戸 健 司

常夏の島フィリピンに旅する機会を得たのは、暮も

おしつまった十二月中旬であった。僅かに三時間あまりで冬から夏と二十度近い気温の差異、その上スペインなまりの英語の総攻撃に直面しては、正直いって脅威以外の何ものでもなかった。

フィリピン共和国の人口は約二千万、これが七千あまりの島に定住して居り、その八十%以上がカトリック教徒であるといわれている。

日本では、戦争は既に遠い過去の事、いやそのあまりにも陰惨な傷あとから逃れたいと切望した結果が、この様な現実には到達したといった方が当たっているかも知れない。然しながら、あれだけの現実がかくもきれいに人々の脳裏から消え去るものであろうか。

「愛国行進国」などといっても、おそらく多くの青年が首をかしげる今日、この頃。海の彼方のフィリピンでは、日本人といえはいまだに「ミョトウカイノソラアケテ……………ワガニッポンノホコリナレ、イチ、ニッ、

サン」というイメージしか残っていない。

こんな彼我における認識の差異が、未だに彼の地において頻発する、日本人に関する不祥事に直結しているのと思われる。

バラワン島に滞在していた時のことである。この島は、日本でいえばかつての佐渡ヶ島。即ち囚人の島である。放銅状態といえは失礼だが、柵もなければ鎖もなく、自由には彼等の行きかう路上をジープで通過して、農科大学に到着したその夜、はからずも学生主催のダンスパーティーに出席するよう懇望された。

数々の歌や民族舞踊のあと、いよいよダンスパーティーという段取となった。先ず私に踊れと指名。幸いその方面には自信があるので、ステップは適当にごまかして紹介あったクァーストレディーと踊ったところ大喝采、次いで石島君がウエスタンを歌ったに至っては、彼等の好奇心は友好にかわり、翌日には、野鶏の採集も、彼等の奉仕によって予期以上の成果を挙げることが出来た。

私達はマニラの南60 Km、ロスバニヨスにあるデラック  
スな「F.P.I.」(国際稲研究所)のゲストハウスにお世話に  
なったが、当研究所と地続きのフィリッピン大学農林学  
部の体育館では、かつて日本軍によって多数の住民が虐  
殺されたといわれ、また山下奉文將軍の処刑地も近辺と  
きかされた。

これでは忘れろといっても、戦時中の悪夢は消える筈  
がない。

巷にあふれる車の多くは日本製、それに街頭には「モ  
リナガ」、「アジノモト」をはじめとして多くの日本の  
会社名を書いた看板がみられ、日本製品が彼等の生活に  
深く浸透している事を如実に物語っていた。

戦時中の悪夢と、「メイドインジャパン」の浸透した  
現在の社会状況、これらの相反する現実の姿を彼等はど  
う心の中で調整しているのだろうか。

子供達はただ旅行者と見ただけで、執拗に後を追って  
煙草を売りつけ、バス(いすゞ製とかきいたが、どうみ  
ても昭和初期のもの)が停まればそれとばかり物売りの  
子供達が窓にぶら下がる。そして彼等は平気で手鼻をか  
み、痰唾を車内にはく。裸足の土着民、そして教人のヘ  
ルパーを使い高級車を乗りまわす富豪達。貧富の差のあ  
まりにも激しい現実をみるにつけ、戦後日も浅い当時の

めるであろう。

スペイン、アメリカ、日本と、彼等の歴史は、長年に  
わたる被征服者としての暗い宿命の連続をよぎなくさせ  
た。然しながら彼等には、美しい魅惑にみちた自然があ  
った。この事が、暗い歴史にも拘らず明るく生きる力を  
彼等に与えたのであろう。

フィリッピンの青年達は歌を好む。南十字星のもと、  
ギターの調べに乗せて奏でる彼等の甘い恋歌は、ほのか  
な花の薫りに乗せて流れて行く。たとえ戦争の夜といえ  
ども、人目をはばかりながら彼等は歌ったのであろう。

「サンバギター」の花が咲く度、彼等は苦難に満ちた歴  
史をふりかえり、二度とこの楽園がふみにじられること  
がない様、ホセ・リサール(フィリッピン独立の父)に  
新たな決意を語ることであろう。

祖国日本を思い出す。

我々を滞在中案内してくれた Dancho 教授が、「Look」  
と云って「The Japanese People is very Honest」  
という新聞の記事をみせてくれた。これによると、「日  
本のほんとのよさを知りたいなら田舎の宿屋に泊れ。田  
舎の方が一段と日本の風情を知ることが出来る。日本で  
は物を置忘れても必ずもどって来る。ホテルやレストラ  
ン、タクシーではチップは無用。むしろ出すと叱られる。  
かく日本人は正直である。」と書いてあった。

確かにその通りであったとは言える。しかしながらこ  
の様なよい風習はなくなりつつはあるまいか。「お前馬  
鹿だなあ。そんなのわからしねえよ。」こんな会話がよ  
くさゝやかれる昨今。外国人からみたらよく反映する風  
習が急速度に減少し、イタリヤあたりでよく直面した無  
責任な考えが台頭してきたのは、かえすがえすも残念で  
ある。

機内から見下した珊瑚礁はエメラルドグリーンに輝き、  
その自然の美しさにたゞ恍惚として時の経つのを忘れる。  
咲き競う花はブーゲンビリア、ハイビスカス、ポインセ  
チヤと数限りがないが、とりわけサンバギター(ジャス  
ミンの事を彼等はサンバギターと呼んでいる。)の薫り  
は、島を訪れる世界の観光客に終生忘れ得ぬ思い出を止

雑 感

助教授 杉 村 敬 一 郎

卒業生諸子の中には商売の助けを大学に来てたのむ人もいるけれどこれはいけない。例えば商売の取引のためにどこかの会社の人を紹介しろとか、何かを安く仕入れるために話をしてくれとか云う類である。こんな人には学士の称号なんかやらなければよかったと我々は後悔する。大学と云うものは世間の商売の助けをするためにあるのではない。商売の世界に入って自力で充分やって行ける学識と人格と気力を持った人を養成するための所である。そこでつめ込まれた知識が実際の商売や仕事にちっとも役に立たないとこぼす人がいれば、その人は高校だけでよかったわけで、大学の月謝だけ損をし、在学期間だけ商売の開発がおくられて二重の損をしたことになる。商売を良くやって行くためにこう云う知識がほしいから調べさせてくれとか、あれこれの問題を調べたり考えたりするにはどうすればよいか、と云ったことで母校を利用することは正しい。

「大学で研究してることとはちっとも役に立たない」と

パラグアイとガウチョと

講師 伊 藤 澄 磨

はじめに  
昨年3月7日に羽田を出発し本年3月24日に無事帰国しました。長い長い一年であり一瞬の一年であり、生れて初めての海外の生活は私の生涯忘れ得ぬ日々でありました。言語風習その他一切が異なる所、いやだいたいアベコベの事柄が多い所へボンと一人でとびこんだ訳で、初めは全くタイミングの合わぬ事ばかり、ウロウロ、ガサガサと三月が経ち、言葉が通じる様になり本格的に仕事が始まったのは約6ヶ月后、それからが大変、大車輪の日日でありました。アット云う間に帰国の日が迫り切符を買うのもどかしく飛行機にとびのり15日で地球を半廻り東京へ帰りました。実にあわただしい一年でした。出発前80kg近くあった体重が60kgに減少し極めてスマートになりましたが米飯のせいとか、又ゾロ太り出し現在では約70kgに復帰しました。しかし一年間の日本の変化は極めて強く感ぜられ、国家経済の発展は別として街

思う人もいるだろう。だがこれは当り前なのである。研究したことで、すぐ技術開発に結びつくのは十に一つあるかないかである。神信心のように先ず「信じ込む」とから発端して行くのとはわけがちがう。科学は、疑って疑ってうたがいぬいて、その一つ一つを事実で捉え、論考を重ねてから納得されるものだから、その一駒一駒が直接現場で役に立つわけがないのである。「現場の経験を累積して高度の技術を習得」したいのなら、高校を二度やった方がよい。

一つ一つの事実を「どうやって」捉え、「どのように」理論体系に則して考えるか、と云うのが学士の教育の根幹である。とすると、このことを理解しているか、いなか本質的なちがいであって、学校の試験の成績とは思ったほど関係がないような気もするのだがどうだろう。

の表情、若者の生き方等につきましましては、その変化の度合いがこと更に強く感ぜられます。何か物すごいエネルギーが渦を巻いて居る所、一口に云えばこれが一年後の日本の印象でしょうか。その為か内陸国パラグアイの或る意味でココセシした、又ノンビリした所でパラグアイ人として暮した私の生活のベースがもとにもどるまで少し時間を要しました。その間交通事故で天国の入口迄行って見たり色々ありました。このたび当「ふじみの」の拙文を投ずる事となりました。今パラグアイから遠くはなれ当国の想い出を綴る前に、日本人として祖国に感ずる忠誠心と同等なもの、いやそれと又別な感情、そう「大好だ」と云う湧き起る気持をおさえる事はできません。

パラグアイ

「南米行ったんだってなあ？ 暑かったらう？」「黒んぼに喰われなかった？」帰国して数多くのこれらの質

問を受けた。私も出発する以前その気になりバラグアイに  
に關する出版物を見たものだ、そして南米帰りに逢った  
としたらその質問したに違いない。所が私の居た時は冬  
もある到着したのが3月初め、残暑はきびしい。4月5  
月と秋も深まり、6月の声を聞くと冬將軍がバタゴニア  
方面から寒い南風を送って来る。7月8月の雨の日  
は0℃と骨まで凍る思い。地方(カンボ)へ来ると0℃  
放牧牛が飢えと寒さで禿鷹の餌になる。と思うと日中は  
三十度近くなる。エンサイクロペティアに平均気温二十  
三度とあったと思っても後の祭り、雨になるとポンチョ  
をかぶり牛の乾皮にグルグル巻きとなり、たき火にしが  
みつくり方法はない。9月に入ると急に美しい花が咲  
いたなと思うと、春の祭(プリマベラ)が来る。突然町  
は華やぐ一九六七年は九月二十一日フアッシュン界にと  
り記念すべき年? そうミニスカートのミニミニに移行  
した年、世界一の美女ラティナのセニヨリタが総出で  
愛用したからたまらない、人口二百万の首都アスンシオ  
ンの街は異様な興奮状態となった。(筆者のみ冷静)  
町角でゴロゴロして居る老若男性はビービーと口笛  
の嵐、そこえさつとミニファルダ(ミニスカート)のセ  
ニヨリタ(金髪)が通りかかると意勢の良い若いのが  
飛び出して行く。

タ河をさかのぼりたどりついたので現在の主府アスンシ  
オン近くと云う。そこでガラニー族にあり、その精かん  
さに恐れ、高い心の文化に脱帽し、美しいクニヤタイ  
(女性)もしくはミタクニヤに魂をうばわれ黄金の夢、  
マラゲニヤも何もかもすててこの土になったと云われ  
る。何万年も前安住の地を求めアジア大陸を東へ東へと  
行き北米大陸へつき当りそれを南下して南米中部に住み  
ついた人々とサラセン文化とヨーロッパ文化の中から生  
れたスペインの人々がごく自然の形で交わり現在のバラ  
ガイ人が出来たのである。そして南米をほとんど支配  
する国となったり囲りの国中を相手にして戦争を始め、  
人口が20万人になったり大変な変転をくり返して現在に  
至っている。しかし御先祖からうけついでものは実に大  
切に保存し又それらをすべて生活の糧として居る。ガラ  
ニー族のもつ尙武と寛大、よき時代のスペイン人のもつ  
騎士道精神と西欧的風習、カノリックの人間尊重、これ  
らが混り合い実に不可思議な国民性を持った人々である。  
そう昭和の一ケタ生れの我々が少年時代至高のものとし  
て教えられ敗戦に依り打ちくだかれたものを数多く保存  
して呉れて居る人々である。  
南米のガイドブックによく南米人とは?と云う書き方  
をして居るものが多くある。この人々に関してはい

若者

「令嬢よ、何と素晴らしい事だ、  
まるで平原の中を行く汽車の線  
路の様なまっすぐな貴女の足に  
栄光あれ」  
とひざまづき  
賛美する。  
(大変にオー  
バー!)

令嬢

「ありがとう。本当にありがと  
う。ミケランジェロの魂が宿る  
貴殿の黒いひとみにおめぐみを」

ポロポ  
ロのハ  
ゲの老  
人

(大声で)  
「俺はなあ! 昔から終着駅の  
方が好きなんだーい。」

とえん然とほ  
ほえみ返し二  
三步  
街角中大爆笑  
で幕

兎に角途方もない陽気な人達が住んで居る。日本とほ  
ぼ同じ位の面積の草原の中に二百万の人が六百万頭の牛  
と平和に暮らしている。五百年も昔、未だスペイン人が来  
ない時ここはガラニー族の天地であった。これらの人々  
は蒙古系と云われ現在も純血のガラニー族として郊外に  
住んでいる。丁度日本のアイヌ族の様に、彼等はすでに  
民主政治なるものを編み出し、大統領を選出し自由、平  
等、平和を旗印として生活していた様子である。そこに  
は未開地でありながら高い精神文化が樹てられ、一つの  
理想郷を追求し目論んで居た様である。そこへ新大陸と  
黄金の夢につかれたスペイン人が現在のアルゼンチンに  
上陸しその地方の原住民と戦い殺りくをくり返しラブラ

たいあてはまらない。実に勤勉そのものである。兎に角  
産業がない、何とか収入を得なければならぬ。日給百  
ガラニー(1ガラニーは日本金3円)でも夜明けから日  
暮れまで働く。中産階級でも子供も働く、学校が2部制  
だから朝の組は昼から夜の組は朝から働く、活力にみち  
た人々である。

ガウチヨ

牧童・牛飼、ノビア(愛人)を数多く持つ不道徳も  
しくはカイ性のある男と釈されるが、カーボーイの事、  
良い仲間達であった。これらは私が初めに農牧省に勤め  
た頃多くの友達が出来た。ハリウッド映画のカーボーイと  
は全くことなる。草原に生れ馬の上で育ち、馬と働き、  
草原に埋められるのを自分の天職とし腕をきたえ男を磨  
いて居る人々である。仕事は牧場内の監視、牛集め、マ  
ルカシオン(焼ゴテ押し)等数多くある。一人で約二  
三千頭の牛をあずかる。テレビのローハイドに出て来る  
男共、あれはガウチヨではあるが、ロス・トロペロス  
(牛追い)として区別される。私の業務は人工授精であ  
る。1牧区千ヘクタール、約八百頭の草の中にもぐるか  
沢の中森かげに居る牛の発情鑑定と授精と妊娠鑑定はど  
うにもならない。いくら富士平の深部ストロー式だ、セ

ミナンだ、と効果をいっても始まらない。特にセブー(印度コブ牛)並にクリヨージョ(土産雑牛)の速く危険な事はこの上ない牡牛は1メートル近い角を向けて来る。サンタヘトロデイス、ヘレホード、アングス等はのそのそしている。ヘレホード、アングス等のベテグリー(純系)は熱帯に不向であるが、これらの牛集めは彼等に一任二三時間もあれば追込柵は牛であふれる。これを仕分け、一頭ずつ柵場へ追い込む。そこで妊娠鑑定、午前三百、午後二百、私の右腕はしびれて握力ゼロ、爪と指はささくれて感覚無し、掌の中の骨と髓はバラバラになった感じ、これで一日が終る。その間私は「オートラ」(次ノ)「ブレニア」(妊娠)ノ、この三語だけ。ガウチヨ達の牛へのドナリ声と鞭の音、牛の叫び。会話が無い集団である、十人居ても二十人でいても休みもなく昼飯もなく水だけ飲んで会話もなく、モクモクと日暮迄に片づけるだけ。夜になりカバタ(ガウチヨ頭)から肉1kgと百〜百五十ガラーをもらい晩飯となる。

夕方、草原に静けさが訪れる。鋭い鷹の雄叫びも、何百となく群をなし互に勝手なオシャベリで世の中をさわがしくして居たインコの集団も、いつか姿を消す。日中牧柵の上に一羽ずつ置物の様に止まっていたフクロが一羽一羽彼等の夜の世界へ去って行く、そして本当の静寂

なガラニー語の会話が始まる。始めは全くチンブンカンブンの言葉であった。ガウチヨとかぎらずバラガイ人は日常ガラニー語を話す。公用もしくはアスンセーナ(都会人)はスペイン語であるが一たび家庭もしくはカンベシーノ(地方人)と話すのにはガラニー語でなければダメの様である。勿論スペイン語が通ずる。しかしこの人々は言葉が通じて心を通じなければ意味がないのである。心のつながりが全ての社会生活の出発点となる。私が幼児の様に口真似でガラニー語の発音をするところから始めて仲間となり、私の技術を受け入る事となる。どんな優れた事柄も伝えるもしくは与える人がガラニー語に違和感を持ちテレレ(茶)の回し飲みの風習を不潔としたら背を向け敵となる人々である。小鳥の囀りの様な響きを持つガラニー語はスペイン人が来る前から代々耳から口、口から耳と伝えた言葉であり、現在ではバラガイ人のみを使う言葉である。字になりにくい言葉であり又発音もむづかしい。しかしこの言葉を非常に大切にし、現在小学校の正課に入れようとしていると聞く。ガウチヨ達は子供の頃、学校ではスペイン語を習ったのであるがガラニー語一本、教訓だけはスペイン語、もし英語でも口走らうものなら「このキザ野郎」てな事で親方に半殺しの目に逢うであろう。

が来る。静けさが耳の中から脳の中へしみ込む。タバコの燃える音がGSの音響以上なストレスとなる。約三分草原に大の字にコロがっていると、地平線の外からとてつもなく大きな月がゆらゆらと上る。まぶしい月の光私の初めて知った事だ、真上に南十字星の一寸ゆがんだ菱形が現れ出す。太古と云うのは何年前か知らないが、多分こんなものである。それ以外考えられない。太古なのだ。この静けさは、しかし時折、人工衛星がパチパチしながら空を横切る。太古ではない。20世紀に違いな街へ行つて何か仕入れて来たのである。大きな焚火が作られ晩飯となる。アサード。木の枝に1〜2kgの肉片を刺し火であぶる。それに塩と野生のレモンをかけナイフで削って食べる。黙々と食えである。食卓は空箱に真白に洗ひプレスした布をかける。ナイフはピカピカのゾリゲンズのテーブルナイフ、サッサッと鑑で研いては肉をささむ。アペリチーボ(食前酒)はカンニヤ(サトウキビ酒)。すべて立喰い。

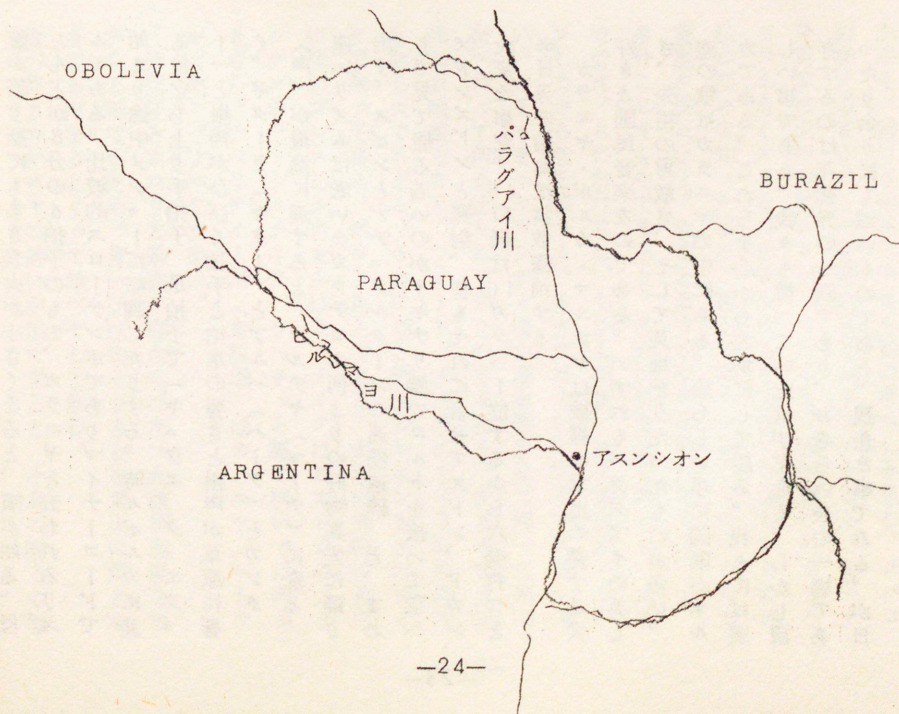
屋間汗とホコリと動物の脂だらけだった彼等が髪をキチンと油でかため、青いひげのそりあとを焚火に輝かせながらだまりこくって喰べそして飲む。喰べ終りカンニヤの酔いが出て来ると、小鳥の囀りの様

飯が終り話にもあき焚火が小さくなると、唄が始る。ほとんどが8分の6拍子のもので、ガラニヤと云われるリズムである。比較的スローテンポでありマイナーコードで始まり途中メジャーに転調したりする。時々ポルカに変わる皆立ち上り手拍子、足拍子で「キューエ クエエ」と掛声がひびく拍手と拍車の響きと掛声が草原に響く。ギターラ(ギター)とアルバ(ハーフ)とカンタ(声)が最高に達すると、マルチャ(マーチ)に変わる。速いリズムは老いたガウチヨの何よりの好物真先に踊り出す。スピントナチュラルタインの連続連続。と、まわりで見ている若いのがイキナリ腰のコルトを抜いて空へズドンズドンと発射、皆もそれに合せてズドン、ドカン、大変な事だ。45口径は10ガラニー位するから六発打つと半日分の給与は雲散霧消する。

ガラニヤ・ポルカ・マルチャは彼等の本当の愛する大好きな国民音楽なのである。いずれもバラグアイの美しさ、先祖の勇敢さ、そして英雄をうたったものが多い。恋の歌はガラニヤの中にある。珍らしい事に国歌がポルカである。これらを心から大切にしている。我々には羨しい事である。我々も持っていたはずである。しかし現存するのは花柳界の一隅であり、おさらい会の一場であったり余りにも遠いものである。残念な事である、が日

本文化の発展から見てもこうなるものなのであろうか。ガウチヨの中に器用な老人でも居ると隣国の唄を聞かせて呉れる。アルゼンチン・サンバとチリー・サンバである。美しいスローテンポのリズムのはっきりした、ギターラの弾き唄いは楽しい。サンバはブラジルと我々は決めて居たが、やかましく暢気なチンチャラと金の打楽器が入るのはリオのカルナバル（謝肉祭）のテーマだけの様であった。タンゴはあまり好まれない。「ガウチヨの恋」なんて云うアルゼンチンタンゴがあるのでさぞタンゴが聞かれると思ったがこれは非常に難しいとの事、タンゴは詩を聞せるものであり、役者でなければ唄えないものとされている。後日或劇場で演奏を聞いたが、歌手は頭の毛をかきむしり絶叫し、ささやきかけ、泣き、失神に近い状態となる。これがタンゴと云うものらしい。夜も更け歌に疲れた頃カバタが「眠るべ」と一言、暢気に歌っていた連中もビタリ、ガウチヨの無言の顔となり、肩を抱き合い頬をつけ合い感謝の祈りの言葉を交す。「今日一日の友情を感謝する。闇の中の平安と明日の恵みがありますよう」。

後無言のまま馬に乗り別れる。素晴らしい星の下に生れついた男達である。



### フィリピンで見た家畜

助手 石島芳郎

筆者は一九六七年十二月中旬に、野鶏の調査のために渡島した一戸助教のお供をし、約二週間フィリピンを訪問した。この間、滞在は短期間ではあるがルソン島、

パラワン島、ミンダナオ島、セブ島の諸島をまわる機会を得た。そこで、これらの島の見聞をもとにしてフィリピンの家畜を紹介してみたい。本文にさきだち渡比の機会を与えられた平林教授ならびにこの稿を書くにあたり適切なご助言を賜った一戸助教に拝謝する。



フィリピンの家畜の種類は、水牛、牛、馬、豚、山羊、めん羊、鶏、あひるで、このうち豚、水牛、牛、馬の順で飼養頭数が多く、鶏の羽数もかなり多い。最も主要な家畜は水牛、豚、鶏と考えられる。この国の家畜のほとんどは土産種で、飼養形態も、そのほとんどが原始的なものである。したがって飼いは方はいのちに入れているのは良い方で、多くは放飼されている。

豚はフィリピンの主要な家畜の一

つて、飼養頭数は最も多いと思われる。私どもの見聞した範囲では、マニラの郊外にはあまりみかけられなかったのに対し、パラワン、ミンダナオなどの島で見る機会が多かった。この国の豚は全身黒灰色の土産豚が主体となっているが、そのほかにポーランドチャイナ種およびそれと在来種との雑種がかなり飼育されていた。またミンダナオ島では野猪によく似た外観の豚にもおめにかかった。飼いは粗雑で、竹囲いの中の群飼も二、三日撃したが、そのほとんどは、一、二頭を床下につないでおくか、放飼するといった極めて幼稚なものであった。フィリピンでは日本からバークシャー種を入れて改良につとめているときいたが、私が歩いた範囲の一般農家では、それらしいものを見ることができなかった。

**水牛** 水牛は東南アジアに共通する家畜で、フィリピンでもいたるところで飼育されており、飼養頭数はタイに比べて多いといわれている。これは水田耕作と水牛とが密接な関係にあるからで、当地においても主に農耕用、または運搬用として使用されていた。多くの農家では、一頭の水牛を庭さきや、道ばたにつなぎとめて飼育するといった極めて粗雑な飼育形態をとっていたが、中には十数頭を柵内で飼育するというやや進歩した例もみられた。廃畜の肉は食卓に供せられている。

とんどが小型の有色種で、茶褐色、黒色あるいは茶褐色に黒班のものが主であった。主に肉資源として利用されるようであった。

**めん羊** めん羊はミンダナオ中央大学の農場で山羊との混飼をみたのみなので、フィリピンでは主要な家畜ではないようである。

**鶏** 鶏はマニラなどの都市近郊に飼育場がある以外、斗鶏用のものを除き一般農家はいずれも放飼形態をとっている。羽数の点では日本に匹敵する程度といわれ、鶏肉の利用が普及しているが、その品種は、近代養鶏が行なわれているところで白色レグホン種、ニューハムプシャー種が比較的普及している以外、いずれも在来種との交雑種で、その経済性は低い。とくに奥地に入ると赤色野鶏に形態の近いものが多数見られ、在来種の中には日本鶏に酷似のものがかなりみられた。乾期に訪れた関係からヒナをつれた雌鶏にいたるところで出会ったが、ヒナの数は五〜十羽程度で、それらの羽色は黒ならびに褐色のものが多かった。斗鶏用の雄は一羽ずつ脚に紐がつけられて飼育されているのがこの国の特色である。なお奥地では野鶏の雄を斗鶏用を使用するために、土着民がわなをかけて捕えたり、卵やヒナをあつめてきて飼育していた。

あひる あひるの飼育はかなり盛んであるが、これら

**牛** 牛の場合は豚や水牛にくらべ普及度は低い。しかしながら飼育形態は一応の規模のもとに行なわれており、多くは使役に、一部は乳用として利用されている。肉資源としては用途を失ったときのみ流用されるといった程度である。この牛はインドのゼブ系と推察されるこぶ牛が主体となっており、私たちの踏破した範囲では、ホルスタイン種のような乳牛の飼育はわずかにパラワン島の農科大学で乳質ならびに乳量の改善のため、インド産のレッドシンデイレ種に交配している例を見たにすぎない。またブギノン台地(ミンダナオ島)の牧場に大規模に飼育されているネロール種(インド産こぶ牛)をバスの窓から望見した光景は、これに隣接するデルモンテのバイナップルの大圃場とあいまって、南国ならではの情緒をかもしだしていた。

**馬** 馬はいわゆる小型のポニーが主体となっているが一般に少なく、主に運搬用としての都市での馬車のけん引と、牧童の乗用などに利用されている。ミンダナオ島のブギノン台地の放牧場では、土産馬の改良のためにアメリカから種畜を導入して交雑種を作り、その能力の改善する試みがかかなり大規模に行なわれていた。

**山羊** 山羊はマニラ市郊外、パラワン島などに放飼されているのを見かけたが、その数はあまり多くない。ほ

は主としてマニラ近郊などの飼育場に飼われていた。

以上短期間に踏破したフィリピンについて、その家畜の飼育概要を紹介してみた。総括的にみて、日本人の畜産概念ではただ原始的形態の一言につきるが、あるいはこの様式がフィリピンの現状にあった姿かも知れない。また筆者の見聞があまりにも表面的にすぎたために、その本質を把握できずにこのように映じたという点も免れない。この点に関しては、今後比国を訪れる学生諸君の協力により、真相が究明されることを切望する次第である。なお、東南アジアの畜産に興味のある人はつきに掲げる論文を参照されたい。

- 横地敬二：東南アジアの畜産，畜産の研究，14，237-242，(1960)  
福田紀重：東南アジア諸国の養豚，畜産の研究，14，243-248(1960)  
今村文雄：東南アジア諸国の養鶏，畜産の研究，14，249-253(1960)  
藤岡保夫：バリ島の畜産，畜産の研究，15，1030-1034，(1961)  
佐々木清綱：堀祐司：インドネシアにおける家畜の品種，畜産の研究，17，1425-1428，(1963)  
西川義正：東南アジアの畜産を見て(1)，畜産の研究，22，657-660，(1968)



# 雑感

## 新入生諸君へ

前委員長 奥 泉 仁 一

この伝統に輝く、農業の殿堂、東京農業大学畜産学科、エリート学科を志望致し、見事その栄冠を勝ちとられた、新入生の諸君、御入学おめでとうございます。遅ればせながら、心から御祝いを申し上げます。

大学生時代は、青春の最も、貴重な人形形成の時期であります。諸君は、最高学府の一学生として、誇り高く、又、自己の持っている能力、個性を充分發揮し、充実した生活を築きつつ、明朗闊達な、悔のない、実り豊かな四ヶ年、あるいは八ヶ年の大学生活を、共に送るうではありませんか。

又、畜友会という組織は、畜産学科に入学した学生全員と、鈴木科長を初め、畜産学科のオーソリテイのある諸先生、全員が会員となり、畜友会規定第一章第二条の

も夜空の月がきれいだなあ。

八月十日(土) 雨

。豚解体の時いくら勉強の為とはいえかわいそうで見えいられた。

。休みほけで豚の種類などほとんど忘れてしまっていた。講義も大事だけれど実習をする方が楽しい。机上勉強をそのまま実行に移すことはむずかしくて、いざ実習をすると、そのくい違いが現われて来るが、その経験が今度は机上勉強に役立つと感じた。

八月十一日(日)

青山寮九号

目がさめたら雨であった。それにもかかわらず先生が起こしに来た。そして二〇分間掃除のあとは休みになった。我々にとって、睡眠はなにより楽しみであり、かつごちそうである。

午前は大森先生の果樹、川島先生の稲の話があった。とても参考になった。但し俺は昼寝していた。

午後は豚舎の管理である。解体の時の豚よりもとてもかわいく、ブラシをかけてやるととても喜んだようにみえた。我々の愛情が通じたのであろう。しかしやつは俺をけとはした。

目的に基き、活動していく機関である事は、諸君は、もう御存知の事と思う。又、今年一ヶ年の畜友会行事が役員の方から発表されましたが、その活動に於いて、我々会員は、ただ受動的に受け入れるだけでなく、積極的に参加し、それを深めなければならぬと思います。で、毎日が、有意義であり、且つ又、充実した学生生活を送るうではありませんか。

## 夏季実習感想

青山寮一号室

八月九日(金) はれ

これからの八日間を考えると、とても不安と期待の入り混じった気持ちでした。が、レクリエーションの時の自己紹介のなごやかさでなんとなく安心しました。僕達の班は鎌を持つことがほとんど初めてなので、ちょっと刈っただけでも手が痛いと言っていた人がいました。又風呂も食事のままあまあという事です。(いや十分です)が、食事の時もう少しゆっくと食べたかった。それにしても夜空の空がきれいだなあ。

八月十二日(月)

ガンパロー三号

傷病者調査。三名異常、怪我と腹痛。

久しぶりの良い天気だった。汗を流してのやっと実習らしい実習をやれたというところが腰や腕が痛くて。罪の意識にさい悩まされながら、今日も若きms鶏を一羽虐殺させてしまった。俺は一体どうすればいいのだ。神様許して!

八月十三日(火) はれ

青山寮四号

朝食前に牛にブラシをかけ、朝食後トウモロコシ刈をした。刈取中鎌やカヤの葉で手を切る人も多かった。午後からはバレーボールとクロスカントリーをし、Aクラスはバレーボールが二位。クロスカントリーが三位で、一位になれなかったのが残念だった。その後野外で羊の肉等を食べた。腹いっぱい食べ、とても楽しかった。今日が一番楽しかった。

八月十四日(水)

青山寮八号

朝の実習―野草刈り。案外早く終わった。午前の部―サイレージ詰込み。我々八号室は三班なので最初はデントコーン運搬↓カッター↓サイロの中に入り踏みつけ。サイロの中ではみんな「ワッショイ、ワッ

「ヨイ」とかけ声をかけ、よくがんばった。サイロから出たら汗がびしょりだった。サイロから出た後の部 野草刈り。鈴木先生の指導の下で二ヶ所にわたって刈り取った。大部みなさん謙の使い方がじょうずになったので、早く刈れた。

八月十五日(木)

青山寮十一号

例によって例のごとく草刈りに始まる一日であった。私の草刈りも日が増すごとに、どんどんどんどんと上達し、今では他の学友もおろか、先生までしり込みする程の腕になった。非常に私自身満足である。

午前中のサイレージ詰込み、私は努力に努力を重ね、過去に前例のないほどの、よいものが出来たと思う。やがて夜が来た。当然あたりが暗くなる。暗くなると気分がよい。気分が良くなると何かやりたくなる。やりたくなればやらねばならない。そうだやろう。我々十一号室のおえら方はボンファイヤーで今色夜叉をやることになった。結果は私が言うまでもなくごりっばであった。ユーモア賞をいただき、私の目は涙でいっぱいでした。恥ずかしいので便所に四〇分程ガンバッタ。よく出た。

八月十五日(木)

ガンバロー六号

今日は明日で実習が終わるといっているので、みんな元気良く飛び起きた。

朝食前の作業は雑草刈取りをやった。みんなすごい勢いでどんどん刈取って、みるみるきれいに刈取られてしまった。

朝食後、乾いた牧草を一ヶ所に集めてトラックへ積み込む作業をむんむんする暑さの中でやった。もう五日間の疲労が積み重なって体が弱って苦しそうであった。

午後はサイロの仕上げを見学した。サイロの中を必死になって駆け回った僕等の苦勞が、見事に実って、仕上がったサイロの中を見てとてもうれしかった。その後二時半頃から牧草を一ヶ所に集めて、その草を直方体の箱につめて直方体の形にする仕事をやった。最後の力をふりしぼって必死にやっていた。

夜から各部屋による演芸をやった。ファイヤーを囲んで笑いが絶えなかった。

八月十六日

ガンバロー六号

朝六時「起きろー」という先生の声に驚いてみんな飛び起きた。「ワー今日で終りだ。終ったんだあー」と誰かが喜びのあまり大声で絶叫した。

。蚊が多い。

。売店の売る時間をもっと長くしてほしい。

。お互いの親睦を深めることができた。

◎ま と め

色々と私達の為にお骨折下さった場の先生方、並びに農大の先生方未熟な私達をこゝまで御指導下さいまして本当に有難う御座居ました。省みまして、つらかった事、楽しかった事など色々ありますが、まぶたを閉じると、その一つ一つがハッキリ思い浮かんで来ます。

これで我農大畜産学科一年及び二年生は、家で成果を待ちわびている家族に胸を張ってどうとうと会えると思えます。

どうも有難うございました。

最後に農大厚木農場の繁栄を祈ってこの日記を終らせていただきます。

暑い暑い真赤に燃えたぎった大きな太陽に照らされて、お互いに負けまい負けまいと、必死に頑張ら抜いたみんな。毎日毎日作業衣がびしょりになる程汗の玉をだらだら流し、のどの乾きを我慢して働いたあの苦しい苦しい日々をついに克服したうれしさは、格別であるに違いない。

朝食前の作業は敷きワラ用の草刈取りをやった。もう大部うまくなかった、みんなの腕できれいにあつという間に刈取られてしまった。

◎八日間の反省・感想

。朝の起床が早すぎる。

。飯が固い時があった。

。風呂は熱過ぎたり、水みたいな時もあったので、いつも万全を整えてほしかった。

。仕事の割当が均等にいかなかった。

。仕事中休憩時間をハッキリ決めてほしかった。

。仕事を暑さのためダラけた。

。皆一生懸命実習した様だ。

。思ったより実習はきつくなかった。

。洗濯機をそなえてほしかった。

。便所がきたない。



(告 別)

かがやみのる

暗い部屋の中に  
じじいとばあが居て  
じじいは今死にそうで  
ばあがその枕元にすわって  
頭をなでている

八十余年の愛が手ぬぐいを持ったばああ  
右手に今見事に還元され  
じじいの  
小さくなった顔に  
かわいくなった目が  
実に黒々と澄んでいる

“そっとしてやろう”  
俺は入ることをやめて  
そこへすわった  
素朴な生が今  
ごく自然に天に  
帰ろうとしているのに……  
だが——俺のこの涙は何だろう

「無 題」

タバコに火をつけて  
吸わないで灰皿へ  
煙

それは、自分の歴史を作る様にのぼる  
机の上にはビーナッツが  
壁にはコーラのビンが九本  
ウイスキーのビン六本  
全部空

状差しには封筒が九本  
家から金を運んでくれた奴  
十個の鈴 収穫祭のなごり  
ダヤンルックの女のピンナップ  
淋しさの遺物

I.K

ホイルキャップ 自分のアクション  
六十個のマッチ 自分からの逃避  
目と人間のイラスト 友人  
源氏物語 文学への憧れ  
せんたくもの 実生活  
専門書 未来

何もしてないよう  
歴史は出来ていた。  
三百日しか経っていないのに  
もうこれだけでも出来上った自分の歴史  
「ポトリ」とタバコが灰皿に落ちて  
煙が消えた

孤 独

M. E

そこにあいつがいた  
俺は満員電車にゆられていた  
周囲をみまわしても  
知人は誰もいなかった  
俺は無性に寂しくなった

そこにもあいつがいた  
俺は広い草原に寝転んでいた  
虫やひばり以外には  
音をたてるものはなかった  
俺は急に誰かにそばにいてもいらなくなかった

そこにもあいつがいた  
俺は夜ふけまで本を読んでいた  
もう皆寝てしまい  
ラジオの声だけがやけに大きかった  
俺は急に誰かが恋しくなった

あいつはどこかへ行ってしまった  
俺は恋をした  
電車の中でも草原でも  
どこにいても一人ではなかった  
俺は毎日が楽しくてしかたなかった

あいつはまだ来なかった  
俺は楽しそうに町を歩いていた  
そこでは彼女が男の人と  
腕くんで歩いていた  
俺は何か打ちのめされたようだった

あいつは再び帰ってきた  
やはり俺は孤独だった

反 歌

かがやみのる

宗教というものはもっと静かなもんじゃな  
のかい  
どうして信仰が選挙にくい込んで  
なんで信仰よりも  
そっちが大事なんだい

本棚をみれば池田大作一色で  
それより他に何も知らされずに君は生きて  
きて  
班長にされ  
区長にされ  
おだてられ　そして  
何をやってるんだい

題目をあげて目の前を  
開こうなんて  
本気で思っているのかい  
俺達は何よりも  
今  
生きてるんじゃないのかい

## 中間的學生

S・T・生

それを阻止せんとする者

揉み合い 殴り合い

帰れ！ おまえこそ帰れ！

それをけしかける學生

それを止めようとする學生

これが大学か……？

これが学問の府か？ 大学の自治か？

何もすることができない

中間的學生

勉強するでもなく

遊ぶでもなく

学生活動家でもない

中間的學生

両端に近ずきもせず

速ざかりもせず

仲間だと言われたり

訳もなく侮辱されたり

喜びもせず

鬱憤をはらしもしない

中間的學生

学内紛争の中で

集会を統行しようとするもの

## 特別寄稿

### 屋久島の想い出

林学科三年

梅田 真一郎

鹿児島港を朝八時、我々三人を乗せた屋久島丸は、島へ向って出航した。

途中、錦江湾内で佐多・山川両港を結ぶフェリー・ポイントに出合い、デッキの上からお互いに手を振り合ったのであるが、知った人が乗っているはずもないのに親密な友達と別れるかのような心持におそわれたのは何故だろう。

五時間余の短い航海を終え我々の船は宮ノ浦港を経て安房港へと到着した。

船が大きすぎるためか、船自身港へは入れず、はしけと称する小さな舟が我々を迎えに来たのである。

島へ足を踏み入れてまず感じたことは、三月の半ばと

言うのに「暑い」と思わず声をたてた程太陽の光りは強かった。(それもそのはず、港の近くにある小さなパチンコ屋では「冷房中」の札をたてていた。)

この後、我々三人は島のまわりを走るバスで約一時間、尾ノ間へと向った。

車窓から目に映るものは、まず右側に千米を越える峯が三十もあるという屋久島の山々、そして左側には黄色に咲き乱れる菜の花、赤紫色のレンゲの花、そしていかにも南国らしくサトウキビ畑、道端のパナナの木々の連続である。

その夜は宿の窓から、都会では到底見られようはずもない無数の星を眺めながら、船旅の疲れをとるべく深いねむりへと入っていった。

一夜明けた今日は、いよいよ一九三五米の宮ノ浦岳を筆頭とした屋久島の屋根の下へ入るべく探険である。

毎年多数の登山者を招いているという屋久島の山々ではあるが、我々のとったルートは、乃木小屋を経て花の江河へと通るのであるが、道しるべなどまるでないものである。

過去に一度か二度野生鹿がおったかなと思われる道なき道も歩いた。

チョッピリではあるが沢登りも楽しんだ。

デッカイ岩が、幾重にもかざなつた沢であつたが、大雨の時など、さぞかし壮大なものであらうと思いつつ。一千年から三千年に達する天然スギの偉大さ、言葉ではとてもあらわれぬ偉大さである。

奥へ進むにつれ、日の目をあびたことのないものをみるしんみりとしたそして、ほのかな喜びで胸がしめつけられるようである。

山道は、古い歴史を物語るかの如く老木が不規則に立ち並び、ひとたび屋根へとぬけると、神秘さをたたえた山々が美しく展開されている。

ふもと付近では、熱帯・亜熱帯植物が繁茂しているというのに山の頂上付近には未だ雪が残っていたり、これも又屋久島の特徴なのであらう。

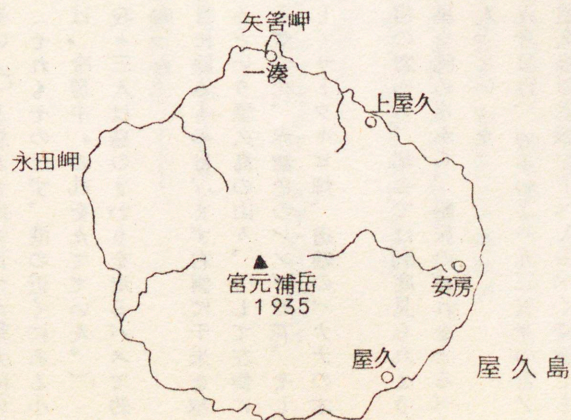
又、千五百米位の高さの岩はだに滝をつくる屋久島の山でもある。

そして、屋久島美人とても言われているのか、顔立ちのスッキリした女性が多いのも、島の美点であろう。

この三月に中学を出て、大阪に働きにゆくという、帰りの船の中で会った娘さんも、とても可愛いらしかった。親元を離れ、新しい人生を歩み始めるための別れの淋しさをこらえているかのように、速く、広い海をじっと見つめていた彼女の姿に何故かひかれていった僕である。

『君は、島を離れて都会へ行くけれど、大学で山と木の勉強をしている都会育ちの僕は、将来を屋久島で送るかも知れないよ』と、言ったときの淳朴な彼女の笑顔を、僕は一生忘れられないであらう。

彼女の前途を祈りつゝ、石南花の咲く五月に又いつか、きつと訪れることをかたく決心して船をおりていたのである。



## 随想

### 農大生一年のある

#### 日々の記録

二年 豪 崎 義之助

農大一年、過ごして来た今日、目的というものを持ちはしたが、そうした状態に陥るまで、つまり農大かぶれとやらが体中に出てきて、かゆい程であるまでの俺個人のある日の記録なるものを公表しよう。俺一人ではなく、きつとこのような体験は多い事であらうと思う。何かの役に立てばと思いいここにあって公表した次第である。

一月十八日

俺は希望にふくらんだ。はとが天空にはばたくように現実を半分忘れて、神をうのみにして、大学進学なんて巨峰の前の小山だ。

ただ一つの真理は、勿論、金もうけによる欲望の充足だ。

二月八日

今はもう反抗という俺本来の姿さえ忘れかけている。人試の為だ。だがその小さな問題にさえ俺は反抗出さず、全く楽しくない、生きる気力さえ抜けてしまつて死にたいような気持だ。

四月九日

明日は東京の空の下、頭が重い。大都市というえたいも知れぬ大きな怪物への恐れか。嫌悪と嘔吐が交錯し合うこの大きな染みは大嫌いだ。しかし、一度死のうと思つた身だ。死よりの恐怖はまだあるがそれ以上のものはない。何でもぶつかつて行こう。

己の欠点、よく知っている。手もとにあるのだから。だからこそ恐いのだ。あえて恐怖と呼ぶのであれば、それ以上の恐怖は、つまり欠点が死との連絡口のように思えてくるのだ。(もうやめよう、死の恐怖の事は。)

四月二十二日

いいかげん退屈してきた。すべてに。もう人間作業にあきがきた。

たつた十数日でこうだ。数十年も生きている人間はよほどの物好きかばかに違いない。生きる喜びなんて一かけらもありません。

学校の帰りにいやなものを見た。農大生としたら当然

の事かも知れぬが、しかし俺には少々どぎつすぎた。兎の首根をつかまえピカッと光る鋭いもので一突き。アワを立てたどす黒い血がその鋭さを鈍らせ、男の手をのろうように、はって流れた。光っていた眼は白さが増し、夢中で動いていた体もピクピクするだけ、人間はむごい事をするものである。

俺の退屈した気分と、そのむごたらしさが、妙に交錯し、青くなって、嘔吐をも出しそうな暗い色となった。

十月十八日

己の生長に目をみはる。内面的生長にである。どんな大学であっても、学び、悩む事によって大きく生長するのだなあと痛感した。

今となっては友達欠点の過去に似ているので、彼らを嘲笑する事時折である。

同年輩あるいは年上の連中が、あたかも幼子のごとき振舞いに、あれが学生か、あれが年上の奴かと、全く話にならぬ次第である。しかし、彼らが無気力で幼なければ、そうである程、俺の心は喜びにわくのである。

彼らに、「おい、お前らはかわいそうな奴だなあ」とでもなくさみ事を言わねばならぬのだが、教育者でもないし、また言った所で、馬鹿どもは聞いてくれる訳もないし、ただ自分の愚かしさを暴露し、己の欲望を強く打ち

出しているだけの彼らなのであるから。だが俺は自分を誇示し、己だけ胸を突き出しているのではない。そういう人間が落伍しているのを知っているからだ。だからそのつもりではあるが。ただ彼らの行為がたまたまだけなのである。

十一月十九日

俺は悩む。己自身の魔に落ちた態度に。

己の為、夢に描いた世界への実現があやぶまれてきたからだ。

俺の心の弱さから俺の夢の一つ一つが俺の眼前で爆発して行くのを見ているような気がして、苦しい、自業自得というあまりにも手ひどいしうち、俺はたえかねない。俺は一体どうするのであるうか。

一人の男が、入試に直面し、その社会的不安と自分の内との不調和に悩み、やがて入学した大学をも、全くの想像外、しかし、自分というものを、新しい自分を見出す事により、一見大学浮けのようであるがしかし、だれよりしつかりとした己というものを発見する。人間の生長なんて、皆同じようなものである。肉体的にはだ。しかし、頭の生長は、各人の環境、本質、様々な要素により、ちょっと違ったものが出来てくる。

ていた。

大学生生活の満足も大切。しかし、次の段階への飛足のようなものであるそれにとって、学問的精神的発達以外何を求めようというのか。高い金を取るばかりが大学では決してなく、また、ボーッとするのも大学ではないのだよ、諸君！

## 一言申す

畜産二年  
米倉義視

理想主義の固りのごとき一学生が、理想主義空しく、我が国の農業の将来というべきものを、実現可能な限りにおいて、表面的な設計を試みた。その青写真ともいうべきものが次に述べる事柄である。自己の知る限り、また、推測可能な限りにおいて簡単に明記したまでではあるが、要は、計画設計的なものに終止せず、批判にまで致ったつもりである。

以上前置きとして、本論に入るとする。

春休みに、埼玉の浦和、大宮方面へ行つた時である。

この近辺は都市化も激しく、東京の落し子の感を程し

ある所では、新と旧とが衝突し合い、その無格好な事といったら真の都市、真の農村を知る者にとって、嘔吐をも出しそうなそれであった。特に真の農民が、その地を見た時、きつと憂うであろう。

言わずと知れた事、宅地、また工場敷地、道路用地に田畑が、あられもない姿に変わっているのである。

点々と散在した農用地の残りとも言うべきものが、雑草の緑だけを残して、真の農作物の姿は、押され気味であるのだ。

片手間の農業としての存在が、農地を忘れさせ、荒廃した赤土と化させたのである。

勿論、散在した農地で、零細な農業経営を営むより、高金額でもって買手のある農地を売った方が、得かも知れぬ。現在においてそうなった以上、農民に、とやかく言うのは筋違いである。

だから農地を売るなどは言わぬ。しかし、農地である以上、農民である以上、職業上の責任ともいうべきものを痛感してもらいたいのである。

勿論、その以前に問題はある。行政上の問題である。

卓上だけの計画と、無軌道な行政とは、長い歴史に根ざした産業と、新との調和、結合はスムーズに行くも

のではなう。

つまりそこに行政の盲点ともいべきものが表面化しているのである。

現在の我が国において、底辺の土台ともいべき農業における、行政的援助不足と無計画さが、またそういう役人連中の農業における認識不足が、都市近郊のこうした社会において、眼前に、まさまさと、表面化しているのである。

農業に関しての認識不足は、役人だけとは限らない。特に一般人の認識の薄さは、我々、農業大学に在籍する者にとって、情けないばかりである。それが根となって、枝葉である、政治担当者たちを狂わせ、工業化一途、それも無道な、雷族顔負けの行動に及ぶのである。

計画が将来性の高いものであったら計画と呼べよう。しかし、彼らの案はその場しのぎの策としか、能を果さぬのである。

しかし、行政上に難があるといった風な言のがれでもって、自ら責任を回避してしまふ事は自暴自棄の行動に外ならないのである。

農民一人一人の自負と、責任ある行動とも言うべきものでもって、現在の日本経済の土台である、農業の将来性にかけるべきであろう。

それが出来るというのは、政治力でなくて一体、何が実現可能とさせうるだろうか。

農業の工業化は夢でも空想でもありはしないのだ。現に一部では、もう実現もしているのだ。

将来、蛋白質が、化学的に合成され、また糖、脂質なども合成食品としての位置を保つに至った時、農業は危々に曝されるであろう。

今日においてそういう事は当然予期すべき事であって、それに対して今から、一応の対策案なるものを持って農業というものを真剣に凝視していかなばならないと思うのだ。

自ら農業問題と取組んだ以上、あくまで、農業を根絶させぬよう、逆に盛んになるよう努めるべきであろう。その為にも将来当然予想される危々に対しての考えというものを、別の見地から考えてみる必要があるろう。

前にのべた工業化の一法だろう。また、生産活動だけの存在の農業ではなく、別に活路を見い出すという方法もあるろう。

いずれにしても、これからの経営においては、過去からのイメージを完全に消滅し、新たな型を作る必要があると思うのだが。

まとまらぬ文体で散在知識を表現したものだから、訳

次にお素末な計画について、一学生の見地から一矢を投げるとする。

我が国において、地方開発計画という名目下では、必然的と言ってよい程、工業化熱を送るのみである。

ただ、農業開発計画と言ったら、大規模な干拓事業を数える程しかない有様である。一般農民に接触した計画といったら国、地方公共団体などの政治上の計画とは無関係に自ら行ひのみなのである。資本的に苦しい農家から、思い切った大事業など出来る筈はなく、たかが、耕地整理程度なのである。

また、一つの問題に、都市と農村の隔絶という事がある。結果、純農村という形態は、主都圏内はおろか、その近郊にも見当らなくなっているのである。

これも行政上の汚点なのだ。そこである。力説したいのは、都市の中心において、純農村の存在は不可能であるかも知れない。しかし、それは現在の形態でもってしての上であるからだ。都市の中で農業も出来ない事はないのである。

つまり、将来性を重んじた計画を農村の軸とすべきなのである。

また、工業化というものをそれにも取り入れ、新たに新時代の農業という型を作るべきなのである。

がわからぬ所もあると思う。しかし、言いたい事はつかめると思う。そう努力したつもりである。ねむい目をこすって書いた為あしからず。

## 「学生々活」

経堂⇩新宿

緑のキャンパスがなお一層、その緑を増し、新設の図書館がどっかと腰をすえ、三年間のうちにすっかりその型を変えた農科大学内である。

我々が一二年間の教育課程を終え、大学という教育機関に入学してきたのである。私はここで「何故、東京農業大学に来た」など野暮な質問はしない。それよりも、大学生として、あるいは農大生として、この大学生活をいかに生活していくかである。

ある先輩は、大学生一般教養科目として次のものを上げていた。それは、パチンコ、麻雀、ダンス、運転免許、読書、最後に？、↓である。我々が、「畜産」という学問を研修している以上、直接的には作用してこないが、



「世間とはそんなもんじゃない」、たしかに学問は大事である。しかし、どんなに学問的にすぐれていても、人間、信用がなかったらどうするのだろうか。

まず、大学生のうちに、社会一般的知識は広く、浅く、修得することである。これがなかったら、いかに、高度なる、学問を有していても、信用は零であり、己の高度なる知識はタンスの奥にしまいこまれてしまいうわけである。

とは云うものの、講義をサポートしてまで、これらを修得しろとは云っていない。講義をサポートしこれらを修得して、始めて現代大学生といえるのかもしれない。

## 健全思想について

中 島 暁 彦

思想の根源が認識とするならば、健全思想とは、その認識の場により異なるはずである。近年、特にこの二三年の間に、健全思想の論争がマス・コミや教育の場によって、クロローズ・アップされてきた。某女子大学に

たつては、教育方針を「健全思想」に置いてあり、某大においては、入学式の学長訓辞は健全思想を説いているところである。では思想の中における健全とは何か、また健全思想とはいかなる認識より出発するのか以後の文を進めてみたい。

思想の根源が認識ならば、認識の存在からこの命題は取り組まねばなるまい。即ち、認識とは意識として社会と自己内面よりの対象を感知それにもとづいて、判断分別し、他者の存在を知ることであろう。とりもなおさずこのことは、自己の保持と、生命の本能的維持によるのみ成立することである。ここから思想が発せられるとすると、思想とは、判断によりある一定方向への推理の結果生じる意識内容としての統一的な判断体系として存在してくることになる。即ち人生、社会に対する見解がいかなる方向によるかが、問題となり、この方向が正であるか不正であるかによってのみ、健全であるか否かの判定を下すよりないのである。

現時点において、主義主張にとらわれずに全ての社会には、保守する者と権力を奪おうとする者との対立が生じるのである。その結果、主義主張の違い、つまり思想の相違により、一個の思想犯が生じてくるのである。これが、改革者の立場に立するならば常に英雄でありかつ、

正義である。逆の場においては、思想犯（危険思想）なのである。

かつて、欧州に怪物が迷っていたが、その怪物は、保守権力者にとっては怪物であり、コミニストにとっては正義として、一個の計画経済機構をもたらしした。この様な例によって証明された如く、健全思想とは、その極点を中心とする思想であり、その中心に近い程、健全度を増し、かつ報酬をもたらすのである。よって、健全思想の祖とするところは、一個の主義主張のあるところに、王座が置かれていたのである。

では、思想の中における健全とは何であるのか追求をしていくことにする。

思想が認識より出発していることは前でのべてきたので、それは省くとして、思想が、正の推理による結果生じたのか、不正の結果生じたのにより思想の中の健全度は上下するのである。

かつて、禁欲主義者の集団と、快楽主義者の集団が存在していた。前者は、禁欲による精神的不安と負担の無い世思を置いて、これを最高思想とし、後者は、精神的不安と負担の無いところ、即ち快楽として、禁欲を主張したのである。ここで、両者を見るならば、両者の間の相違は論ずるに値いしないのである。だが、推理として

の方向と、方法から分析をしていくと、甚だしく、相違点が生じるのである。即ち、ある行為の結果を快楽と思ひ想像するか、否かに徹するのである。ここまできると、もう結果は生じたことになる。つまり、思想の中における健全とは、推理が正であるならば、いかなる解き方をして正、として、健全として生じるのである。

よって、権力者は、その保守であるがために、自の思想に近き思想を健全と名づけ、逆者は逆なるがため自の思想に近きものを健全とするのである。その中での上る健全思想という論理方法は無意味な結果をもたらしるのである。

## 「へびの話」

折 田 瑞 郎

自然界に緑あふれる頃になり、野ゆき山ゆく我等を時どきトヒャーと肝玉に冷水をかけられた様な思いをすることがある。へびは大低の人に嫌悪の情を起させる動物である。また、いかにも神秘で不思議な装いをして

おり、からだをくねらせて動く陰険な姿態、猛毒を貯えた恐るべき牙、巻きつけば何物でも締めつけてしまいう怪力を思えば、その印象はますます深められる。

ヘビをめぐる民俗としては、ヘビは諸民族の宗教的空想をそそったが古来ヘビに対する観念は、崇拜と排斥の二つの方向をたどったと思われる。崇拜の方面では、ヘビは死者の靈魂と考えられた。これはヘビが墳墓に住んでいる為？かもしれない。また冥府の入口の番人と考えられた。一方では泉、海、水田など水に関係させられることも多く水の神になり、洪水はヘビが引き起すと考える民族もある。排斥の方面ではヘビは昔から人類、神の敵とされた。スサノオノミコトの八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治や、エデンの園の禁断の果実の誘惑者や悪魔の姿などがある。

我、御幼少の頃のヘビに対しての態度は極めて冷酷なものであった。つとめて小学校の非常な悪童で過ごした時分であったが、山間に囲まれた田園風景豊かな土地で健やかな成長をなした小生はよくよくこの可愛想な運命のヘビ君、大方はヤマガカシや青大将、マムシに遭遇したものである。彼等は竹藪や湿った草の茂みなどにひそんで人前にササッと姿を現わし肝を冷やす思いをよくさせられたものである。時折、藪の中からキィッキュウッ

り逃亡の構えをするのだが、悪童の第二弾で徹底的にひっぱたかれいよいよ逆情の炎をカッカと燃やし、バカッと口を大きく顎をはずしたかの如く開き、眼はガラガラと輝やいてゐる。時たま青黒い舌をチョロチョロと出して許しを請うものであった。そうになると、勇敢な悪童は彼のシッポを手で持ちブルンブルンと勢いよくふり回わし始めヒュンヒュンという音になるとビュッとあたかも繩切れの如く空中へ放り捨てる始末である。この時にはビシッビシッとヘビの体の伸び縮みの反動が手に伝わってきたものである。今になって思うとあのトス黒い血やウロコの光りなど全く寒けのする思いである。

田植の始まる五月頃から秋の稲刈りの時期にはマムシが出没する。マムシに必ずほとんどのヘビ類は衣更えをして田んぼや山竹林を放浪し、時には人家にも訪問して来る時もある。マムシは *Akistrodon halys* と命名される日本本土では唯一の陸生の毒ヘビである。全長六十センチに達し、胴は太く、頭は大きく三角形で、くびは細い。上顎の前端に管牙を有し、毒は出血毒である。食物はネズミ、トカゲ、カエル、他の小さなヘビなどである。初夏に数匹の子を胎生する。毒性について述べると神経中枢を侵して身体各器官特に心臓の作用を停止させる神経毒と、体内の毛細血管を破裂させて激しい

と悲想を嗚声を聞くことがあったが長い棒切れて押し分けてみるとつかい青大将、一メートル半以上もある様子を光沢リリンとしたグロテスクなヤツがネズミをシッポに巻きつけ、まさにのみこもりとしている状態であったりした。嗚声はネズミの懸命の無駄な抵抗である。こんな場合は、我等悪童連は彼の食事が済むまでじつくりと観察し、満腹感を味わった彼を道端へ引き出して殺害を企てたものである。その彼の胴部は今のみ込んだばかりの得物で、ブクッと奇形を思わせるが如く、どえらく膨くらんでいる。これからは悪童連の本番の楽しみが始まるのである。先ず、三〇センチ程度の棒切れを三本準備し、（勿論この時には既に準備完了になっているのだが）彼の頭部と尾部を二本の棒で固定し、もう一本で彼の尾部から頭部の方へと体をゴロゴロと転がしてゆくと、するとのみこんだ得物が段々に口の方へ移動し出す。これを数回繰り返しているとやがてグエッと吐き出されて口外へ飛び出して来る。被害者たるネズミは細長くなり、半ば溶けかかって、白っぽくぬめぬめした感じになってゐるものであったが、得物が何であつたかはすぐに見当が付く位の状態である。

ヘビ君にとってはいたく迷惑でたまつたものではない。苛酷な体罰と恐怖に半ば気絶の状態を体にくねくねとや

内出血を起こさせる出血毒の二つに大別できる。有名なコブラの毒は強烈な神経毒で、ハブなどは多量の出血毒を含有する。毒ヘビによる咬傷のときの実際の治療対策は、ほとんど抗血清による療法にたよっていて、抗血清の製造は一般にヘビ毒を注射したウマの血液から作っている。そうだ、ヘビ毒のおもな成分は蛋白質であるそうだが、その蛋白質の種類は一つのヘビ毒でも十種以上もある。マムシ抗血清の市販のものには七、八種の抗体蛋白質が含まれている。日本のようにマムシとハブの被害があるところでは、両者の毒を混ぜてウマに注射してつくった混合抗血清も使っている。マムシにかまれた時には急激な血圧降下がおきるが、これはマムシ毒の中のある酵素の働きで、血漿の中の特定の蛋白質から生理作用が極めて強いアミノ酸九個から出来ているペプチドが遊離されるためとされる。ブラディキニンと呼ばれるこの強い生理活性物質は、炎症のときの痛みの原因となるものでもあって、マムシにかまれたときの激しい痛みはブラディキニンが遊離されるためとされる。ブラディキニンを血漿の蛋白質から遊離させる酵素の分布は、マムシ類に限られているが、マムシ類のヘビ毒すべてにあるわけではなく、マムシと近縁のハブには含まれない。この他、マムシやハブの類のヘビ毒には血液凝固作用の強い酵素

も含まれているといわれる。

マムシは湿地性の所によく生息し、田植えの準備などで腐りかけた稲ワラなどをひっくり返すとそこにトグロをまいてカマ首をもたげて人間様をドキッと飛び上らせたりする。マムシは昔から非常な精力源や薬効があるとして貴重がられ、マムシ酒や黒焼きに供される。マムシ酒にするマムシを得るには体に傷をつけてはならないとされる。少しの傷でもあればマムシ酒にした後でそこが腐ってきて、ウロコが酒中にとび散り異臭を放つようになる為である。

これをうまく捕えるには少々のコツは必要であるが操作は極めて簡単である。まず、マムシの体を先の丸い棒でノックと逃げない程度におさえおき、マムシの頭へ一升ビンの口を押し込むだけでよい。この時よく棒でおさえおかないと逃がしたり、咬まれたりするから気をつけなければいけない。するとマムシはスルスルとおもしろい様にビンの中へ入ってゆくのである。ヘビとはよくよく穴の好きなヤツであるらしいことがわかる。その後、逃げられない為と空気の流通ができる様にほどよい竹のセンをして、これに彼の首がかかる位まで水を入れて数日間放置しておく。これは体中の泥をはかせる為であると言われている。数日過ったならばその水を全部すて、

今度は酒の素なるシウチュウウナリウイスキーなりをトクトクトクと注ぐだけでOK。この時にはまだマムシは生きているのでものすごい勢いで苦しみ飛び上るが、やがて力つき成仏してしまふ。これが簡単なマムシ酒の製法である。

また、彼を殺したり、死なせた場合には二通りの方法がある。

その一つとして彼の死体を缶詰の空缶にほどよく納めフタをし、もしフタがはずれる様ならば粘土などで上から塗り固めておき、焚火や炉の中へ放り込んでおくとやがて黒焼になってしまふ。この黒コグになつたものを瓶詰にして、切傷や化膿した時などに患部にはり合わせておくと非常な薬効を表わす。この黒焼きの方法はモグラを捕らえた時にも用いられる。

その二つとしては彼の皮をはぎ、肉と骨を取り出しまして、肉は山のウナギとしてカバ焼風にしまして食しますと美味で栄養価も高く精力つき候、骨は串に通しましてコンガリと焼きまして薬として用いられ、これまた良薬にて候。この様にある時は最も嫌がられある時は最も貴重がられるという哀れな運命を背おつた動物これがヘビである。最近では最も敵意をもつて接する女性諸君に愛されるが為にハンドバッグや草履にまで変形されるハブの

例を見ることが出来る。この様にヘビなど「大嫌い」などきやあ、きやあいつている世の女どもなんて実にあさましいものである。

私達の周囲にもこのヘビの様なかわい想な運命に押しつぶされているものはないだろうか、実際は大いに役立っているのに只、外見上の点だけで全体を見る人間どもの勝手さによって。

### Collieの毛色の遺伝について

二十二年 木村昭雄

現在K(英国ケンネルクラブ)で承認されているコリー(ラフ・コリー)の毛色はトライ、セーブル、ブルーマール、ホワイト、セーブルマールの五色であり、セーブルを Phenotype で分類した場合、ホワイトセーブル、ゴールデンセーブル、オレンジセーブル、マホガニーセーブル等の色に分かれ、Genotype によって分類した場合は、ホモセーブル、ヘテロセーブルになります。

ホワイトセーブル、ゴールデンセーブルがホモセーブルに、またオレンジセーブル、マホガニーセーブルがヘテロセーブルに属します。一般にセーブルは  $A^Y A^T EE$  (ホモ)  $A^Y A^T Ee$  (ヘテロ) トライは  $A^+ A^T Ee$  の遺伝子記号を持っていて常識的には  $A^Y$  をセーブル、 $A^+$  をトライと考えて頂きます。いずれの場合も田田という記号がありますが、これは同一素質で、他犬種との交配の場合、問題になります。コリー種間では全く問題になりません。では早速セーブルとトライの毛色の遺伝について話しを進めて行きます。

① ホモセーブル × ホモセーブル

$A^Y A^T EE \times A^Y A^T EE$

この場合、両親犬とも  $A^Y$  の因子を持っているので全犬ともホモのセーブルが生まれます。

② ホモセーブル × ヘテロセーブル

$A^Y A^T EE \times A^Y A^T Ee$

この場合、両親犬の少なくとも一匹に  $tr1$  (ライト) の因子 (すなわち  $A^+$  因子) を持っていますから、 $A^Y A^T EE \cdot A^Y A^T Ee$  になり、Phenotype では全犬セーブルですが Genotype においてはホモヘテロが1:1の割合になります。

③ ヘテロセーブル×ヘテロセーブル  
 $A^Y A^t E E \times A^Y A^t E E$   
 この場合は、 $A^Y A^Y E E 1$ 、 $A^Y A^t E E 2$ 、 $A^Y A^t E E 1$ となり、Genotype では1:2:1になり、Phenotype では3:1に分離します。したがって③の交配において初めてセーブルよりトライが分離する事になります。

④ ヘテロセーブル×トライカラー  
 $A^Y A^t E E \times A^t A^t E E$   
 この場合は Backcross で  $A^Y A^t E E 2$ 、 $A^t A^t E E 2$ となり、ヘテロセーブル：トライカラーの割合は1:1になります。

⑤ ホモセーブル×トライカラー  
 $A^Y A^Y E E \times A^t A^t E E$   
 この場合は全犬ともヘテロのセーブル、すなわち  $A^Y A^t E E$  の記号を持つ仔犬が出て来る訳です。

⑥ トライカラー×トライカラー  
 $A^t A^t E E \times A^t A^t E E$   
 この場合はすべてトライカラーです。

理してあげます。  

$A^t M$	$A^t m$	$A^t M$	$A^t m$
$A^t M$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t M$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$

 したがって  $A^t A^t E E$  が 1:1の割合で出現します。

⑦ ブルーポイント×ブルーポイント  
 $A^t A^t M m \times A^t A^t M m$   

$A^t M$	$A^t m$	$A^t M$	$A^t m$
$A^t M$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t M$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$

 $A^t A^t M m 4$ ,  $A^t A^t M m 8$ ,  $A^t A^t m m 4$   
 $A^t A^t M m$  はパールホワイトと違ってホワイトコロリーとは違って、犬体の大部分が灰白色、黄白色、あるいは純白の毛色をします。一般にパールホワイトは赤鼻で耳が聞こえず、目が見えないか、または目が構造

以上六通りの交配実験より  
 ①セーブルはトライに対して常に優性である。  
 ②  $A^t$  因子を有する場合、ヘテロセーブルになり、 $d i A^t$  の場合トライとなる。  
 という事がわかりました。

次にブルーマイルについて話したいと思います。  
 ブルーマイルは本来トライより発生したのですが Mutation によってこの新しい色を持つ犬が発生したと考えるのは不適當ではないかと思われます。あくまでもこれは仮説にすぎませんが、この問題について現在研究中ですので研究がまとまり次第また発表したいと思います。

ブルーマイルの毛色はM因子によって決定され、このMは優性に働きます。  
 したがってブルーマイルの遺伝子記号は  $A^t A^t E E M m$  であり、M因子を持たないトライカラーは  $A^t A^t E E m m$  で表わします。

⑦ トライカラー×ブルーマイル  
 $A^t A^t m m \times A^t A^t M m$  (以後 を省略します)  
 Male (♂) を  $A^t m \cdot A^t m \cdot A^t m$ 、Female (♀) を  $A^t M \cdot A^t m \cdot A^t m$  (逆交配可能) として縦横に整

的に不具なものになります。マイルホワイトの出現はM因子の重複によって起こるものである一部の説ではクリーの血液型とも関係があるのではなからかと思われる。これは今後の大きな研究課題で、動物の初生児黄疸とも関係があるのではなからかと思えます。(パールホワイトはAlbinoであり、ホワイトコロリーはM因子によって白色の毛を有する)

⑧ ブルーポイント×ヘテロセーブル  
 $A^t A^t M m \times A^Y A^t m m$   

$A^t M$	$A^t m$	$A^t M$	$A^t m$
$A^Y m$	$A^Y A^t M m$	$A^Y A^t m m$	$A^Y A^t m m$
$A^Y m$	$A^Y A^t M m$	$A^Y A^t m m$	$A^Y A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t m$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$
$A^t M$	$A^t A^t M m$	$A^t A^t m m$	$A^t A^t m m$

 $A^Y A^t M m 4$ ,  $A^Y A^t M m 4$ ,  $A^Y A^t m m 4$ ,  $A^Y A^t m m 4$   
 $A^Y A^t M m$  はセーンマイルと呼ばれ、ヘテロのセーブルの遺伝子記号の基本型  $A^Y A^t m m$  の1つのMがブルーマンM因子で置換されたもので、セーブルの色に濃淡の縞模様があります。成長するにつれて縞模様は不明確になります。この交配ではセーブルマイル、ブルーマイル、ヘテロセーブル、トライが1:1:1:1:1:1

の割合で出てきます。

以上の実験結果より

- (1) セーブルはトライに対して常に優性である。
- (2) ブルーマールはトライより発生したもので、M因子によって決定される。

(3) ブルーマール×ブルーマールの場合、M因子の重複によりAlbinoが発生する。

(4) M因子はm因子およびw因子（実際にはホワイトコリーにしか存在しない）に優性である。

(5) コリーの毛色はMendelの法則に従う。

の事がわかった。最後にホワイトコリーについては研究途上である為、次の機会にしたいと思います。

#### (補説)

セーブル：犬体の大部分が金色もしくはマホガニー色でおおわれ、首のまわりに白色のカラーを有する。

トライ：黒・マホガニー・白の三色より成り、頭部は黒く、頬はマホガニー、首のまわりに白色のカラーを有し、残りの大部分が黒色でおおわれる。

ブルーマール：黒・白・空色（鮮明なブルー）・灰色がまだらになって分布する。頭部はトライと同じ黒より成る。

ホワイト：頭部は黒く、頬はマホガニーで、背上に時々黒の島状点があり、残りの部分が純白でおおわれる。  
セーブルマール：セーブルと配色は同じであるが、背上にマホガニーと金色の縞を有する。  
マールホワイト：犬体の全部が純白である。

#### 文献

Collie Fancy 1967. Osamu Takeda 著

## 研究室便り

### 家畜衛生学研究室

家畜衛生学研究室は、今年発足した一番新しい研究室である。と言っても、今まで無であったのが突然出現した訳ではなく、昭和二十七年茂原時代に設立された、獣医学研究室が、今年から内容が少し変更され、それに伴ない名称も変更されたのである。

設立以来、指導されて来られた平山先生が、本年より短期農学科の教授となられた為に、研究室は川島先生にバトンタッチされ、主としてニワトリの病理に関する研究を行っている。これと並行して、近江先生が主治医である家畜診療所における、

獣医学的研究も、今まで通り続けられている。

当研究室の研究テーマとしては、川島先生の鶏病、特に最近さわがれているニューカッスル病、近江先生の犬のフィラリア症であるが、必ずしもこの二つだけではなく、室員はそれぞれ自分の好きな研究もでき、一つのものに拘束されない研究室である。

現在室員は四年生十名、三年生十八名、二年生十二名、一年生七名、合計四十七名の大所帯である。

日常研究活動としては、ニューカッスル生ワクチンの検定、血清学的検査、細菌学的診断、診療所業務等の手伝い、四年生の卒論の手伝い等である。これらは我研究室の伝統である、家族的な雰囲気の中で、互いに協力し助け合いながら行なわれている。又、コンバ、親睦旅行、レクリエーション等もまじえて、より一

層親密感を増し、知識のみでなく、知性そして自主性に富む人間になる様を方針で全員活動している。

### 家畜繁殖学研究室

当研究室は、平林忠農学部長を主任教授に一戸健司助教授、石島芳郎助手の三先生と大学院ならびに三十数名の学生で構成されている。研究は便宜上哺乳類の繁殖と家禽の繁殖にわかれており、家禽の方は一戸助教授が、哺乳類の方は石島助手が担当している。家禽に関してはふ化所要時間と雌雄比、人工授精、属間雑種の作出、ウズラの繁殖生理など多彩で、さらにフィリップンからも帰った野鶏の研究も加った。哺乳類は実験動物を主体に性現象の人為的支配に属する基礎的研究を行ってお

り、さらには被毛・家畜の繁殖調査にも手をひろめている。室員は、週一回全員によるゼミナールのほか、それぞれ卒論のテーマにわかれて文献を中心とした勉強会をもっており、毎週熱心に討論されている。飼育管理、実験、作業なども皆の協力で楽しくすすめられている。

### 畜産経営学研究室

本研究室は、砂川、吉村両先生を中心に総勢五十七名の多くの室員を抱え、意気ますます盛んです。

現在、畜産部門が従来の農家経営に於ける二次的生産部門から、多頭羽数化にともない一次的なものに変わりつつある事により、畜産経営独自の経営分析が、早急に必要とされて来ており、又、他部門との関連性、

他産業との関連性と云う観点からも、多くの重要性を帯びている。そして、この様な農家の希望に答えんと室員一同、連日、計算機を回している。

さて、本研究室の活動状況であるが、春に養鶏班、養豚班、酪農班、肥牛班の四班が合同で、実際に農家におもむき、一定期間内に於ける経営実態調査を行い、夏には、各班別で経営実態調査を行う。その調査方法としては、本研究室で予め用意した調査表に基づき、農協、役場等の伝票と同時に、農家で記帳された帳簿等を見せて頂きながら、不明な点は順次、聞き取りを行う方法である。なお、この調査は、学生の休暇中で農閑期に行なわれる。

次に調査表の処理だが、調査表の集計をまず行い、損益計算書を作製する。

更に、調査表、損益計算書をもとにして、飼料要求率、飼料経済効率、

肉飼比、一人一日当り労働時間等の指標を計算します。この出て来た指標の数値から、個々の農家経営において、欠陥がどこに有るかを判断し、対象農家の経営状態を診断する。

なお、本研究室の卒業生は自営者が多数を占め、地域の指導者と活躍して居る。  
(渡瀬記)

### 家畜飼養学研究室

学校の桜の花は再び散ったが、春は今年も飽く事なく、来た。それと共に、校内には潑刺たる空気が満ち溢れている様子である。我が研究室にも、二十六名の新しい室員が入り賑やかである。果して何をやりに来たのかは、今の時点では、定かではないが、一人ひとり、自分の道を探索しようと思構えをしているのであ

らう。

兎に角、この研究室は、学問(研究)の場を提供すると共に、その人その人の個性並びに、主義を尊重し、伸ばそうとする処に特徴がある。又、学生を大人扱いにする点も加えておこう。これは一人ひとり、自分の発言行動に責任を持つと云う事であり、これから社会人となろうとする者の、しかるべき心構えである。

それから、この研究室の四年は、飲み食いが好きな様である。実の処、そう云う雰囲気があるにはあるのがある。年に五回の、○○会と云うものがあるのからもそれが、うかがわれよう。飲み食い、且つ語り合ひ事の楽しさは誰でもが認めるであろう。何の飾り気もなく、打ち解け合える、その中で、自己を知ってゆく事が出来るのである。

前述した通り、三年生が二十六名、四年はその半分にも満たない、教か

らして、制しきれるか、心配である。それ故三年生の自覚を、大いに促したい処である。

昨年一年間は、伊藤先生がバラグアイに大任を負って不在、一人杉村先生が、種々と学生の面倒に骨を折って居られた様だが、この春その伊藤先生も御帰朝、それに加え、今まで千葉の畜産試験場で勉強をして居られた、栗原さんは、当研究室の助手に就任、よってこれからは、栗原先生なのだが、どうも口に慣れないせいか、云いづらい、又栗原先生は我々の身近な忠告者でもあり、正直云って先生と云うより良き先輩であり兄貴と云った方がしっくり来る様である。

兎に角、杉村先生、伊藤先生そして栗原先生の三本柱に支えられ、飼養学研究室は今まで以上の成果が生まれて来る事だろうと思っている。一、二年の諸君、悩み事あらば、一

寸顔を出してみても如何でしょう。

### 肉利用学研究室

現在斜陽化の一途をたどっていると言われる。日本の農業界において畜産は、近年食生活の改善に伴い急速発展をしている。

その一部門として日夜研究に努力を重ねているのが、当畜産物利用学鬼原研究室である。

本研究室では、  
。肉及び肉製品の保存に関する研究  
。肉製品加工上の諸問題の研究  
。動物油脂の組成並びに酸化防止等の研究課題を目標に、明日の畜産の発展に少しでも寄与しようとする学生達の集団である。  
室員数が後記の如く多い為、やる気のない者は遠慮せず置いておく。

後で追いつこうとする事は並大抵でない。その意味では非常に厳しい研究室である。従って我々は真実学問を修めようとする学生を希望する。当研究室の設備としては立派な加工室があり食肉加工技術の習得には事欠かない。

研究室の構成は次の通りである。  
 室長 鬼原新之丞 副手中野健太郎  
 助手 松岡 昭善 学生四十一名

### 乳利用学研究室

乳利用学研究室は山中良忠講師、古川徳助手の諸先生と普通室員、特別室員から構成される室員制度をとっています。

本研究室は、毎回述べている通り「親しい中にも礼儀有り」のたえの様に先生、先輩、後輩の夫々の立場を尊重し、学ぶ者としての義務を

重んじ人間形成をその第一の目的としています。室員として、学問の追求は人間形成があつてはじめてなしとげられると云う本研究室の方針に添い室員相互の信頼と誠実をもとに、乳・乳製品についての研究並びに製造と広い範囲にわたつて日々勤めています。

周知のように牛乳の需要は年と共に増加し乳・乳製品についての製造は我国農業の重要部門になつていきます。従つてこれに関する学術研究を盛んにして、その応用により今後益々改良発達せしめなければなりません。それには特に牛乳の化学的研究がその基礎となるもので、ここに本研究室の在する重要性が有り、責任を感じている次第です。

そこで毎週行なうゼミナールでも乳利用の発展に遅れぬ様に、国内の文献はもとより外国文献の紹介などを行つていきます。

年間の主な行事  
 新入生歓迎会  
 春の旅 行  
 夏季乳製品製造実習  
 秋の研究発表会及び工場見学  
 卒業論文発表会  
 卒業生送別会  
 等があります。

製品製造実習は総合農産加工実習所にあつて年々処理機械が整い泌乳処理、バター製造、チーズ製造、練乳製造、粉乳製造および醗酵乳製造等の広い範囲の実習が出来ることは大変強い事だと思つています。  
 本研究室は今年で創立五周年を迎えました。この五年間の諸先生、諸先輩の御努力の結果出来上つた基盤を基礎としてさらに一層努力を積み研究に励みたいと思つています。  
 山中良忠

助手	古川 徳
研究生	小林 武
室員	四年 12名
	三年 22名
	一年 2名

### 昭和四十二年度 卒業論文題目一覧表 (畜産学科)

氏名	題目	指導員
阿部 猛	礫摂取にともなう幼雛の食道、素囊、腺胃の変性に関する組織学的研究	杉村
阿部 悠二	養鶏場における実態調査 産卵と疾病について	平山
青木 榛美		
朝倉紀久夫		
浅田 峻	クリームの泡立性に及ぼす食品添加物の影響	山中
浅野 聡一	鶏コクシジウムの治療予防に関する研究	平山
足立 正孝	肉牛の肥育状態とその比較経済性について	砂川
天野 誠一	鶏病の種類とその発生頻度のモニタリング	砂川
伊東 晃	PMSによる家兔の過排卵におけるEstrogen併用の効果	平林
石沢 清夫	Hot-Curingに関する研究 特に亜硝酸塩の浸透について	鬼原

井上 千晴	幼雛に於ける高グリシン投与に於けるアルギニン量の影響に関する研究	杉村
今井 清孝	卵価形成の諸条件とその要素	砂川
今井 敬雄	仔豚の生産原価に関する研究	吉村
上園 宏遠	凍結鶏肉の解凍に於ける肉質について	鬼原
江橋 慎吾	凍結乾燥畜肉の蛋白質消化性に関する研究	鬼原
大園 正行	礫摂取にともなう幼雛の筋胃、内臓、腸内壁の変性に関する組織学的研究	杉村
緒方 重久	畜産物に於ける放射能汚染対策に関する研究	杉村
扇谷 博	冷凍及び凍結保存鶏筋肉の蛋白質の変化に関する研究	鬼原
大滝 晴夫	豚及び鶏肉の保存性及び風味に及ぼすエタノールの効果について	鬼原
沖田 正人	将来の牛乳需給に関する調査研究	砂川
奥村 政喜	食餌性アミノ酸アンバランスの変化にともなう生体組織中アミノ酸濃度の変動に関する研究	杉村
押谷 由朗	ウインナーソーセージのネット防止に関する研究	鬼原
金子 新	鶏の産卵生理に関する研究	鈴木
加藤 裕之	主として産卵鶏の特異物質について 休学(外国)	渡辺

川崎 長盛 卵黄の乳化力に関する化学的研究 鬼原  
 川本 末広 白レグ雄雛の去勢適合差による増体の比較試験 平山  
 韓 秀雄 「反すう家畜に対する飼料蛋白質の差を主体とした飼料の蛋白質レベの差異が反すう家畜におよぼす影響」 杉村  
 北村 昭 凍結真空乾燥肉の脂肪変性に関する研究 鬼原  
 久下徳右衛門 犬フイリヤ症に関する研究 川島  
 ミクロフイリヤと抗体との関係  
 倉重 信次 幼雛に於けるL-Tryptophanの欠如及び過剰の組織中に遊離アミノ酸量に及ぼす影響 杉村  
 小祝 克夫 鶏肉の加肉による保水性の変化に関する研究 鬼原  
 小林 武 牛乳濾過紙による原料牛乳の塵埃の除去について 山中  
 小林 克己 犬猫の各種疾患の細菌叢とその抗生物質感受性について 川島  
 佐古 憲治 飼料圃場率の異なる酪農経営の収益性について 砂川  
 佐藤権三郎 胚の環境の変化が外厚化及び成長に及ぼす影響について 平山  
 沢目 幸男 プロイラー鶏育雛時に於ける各種薬剤投与の肥育の影響について 平山

塩崎 三郎 微生物体蛋白質の飼料の利用に関する研究 杉村  
 鈴木 裕 乳牛の稲ワラ多給飼養方式とその経済性 砂川  
 関 剛 牛舎利用率と酪農経済性について 砂川  
 高瀬 和久 可欠アミノ酸バランスの変化に伴うグルタミンオキサロトランスアミナーゼの幼雛諸器官に於ける力価の変動に関する研究 杉村  
 高田 晋作 鶏胚体液成分に関する研究、特に臓器及び血清中アインザイムについて 渡辺  
 高田 義士 牛乳濾過紙を用いた時の原料牛乳の細菌学的動向について 山中  
 高橋 真昭 市販肉製品中の食品食塩含量について 鬼原  
 田島 敏彰 山羊 *Bovhircus ovis* 及び *Filid* (包虫膿液) 免疫による抗Q抗体の産生に関する研究 田中  
 田中 洋一 鶏と鷄との卵白交換について、胚の環境変化が孵化及び成長に及ぼす影響 平山  
 田村 清蔵 ニューカッスル病生ワクチンに関する研究、特にH<sub>1</sub>価と免疫との関係について 川島  
 伊達 義昭 肉豚の飼料要求率と粗収益との関係 吉村  
 鶴岡 恒雄 山羊に於ける新血球抗原に関する研究 渡辺

戸塚 征彦 家畜飼料へのクロレラ利用に関する試験 平山  
 中島 孝弘 豚の血液型に関する研究 免疫抗体による豚血球抗原分類 田中  
 中村 紘 フルーツ牛乳の製造に関する研究 山中  
 西村 健治 繁殖豚経営に於ける損益分岐点に関する研究 吉村  
 野上 豊 成鶏羽教と補充鶏率との相関的経済性について 砂川  
 長谷川三三男 各種薬剤のプロイラー用鶏に対する発育効果 平山  
 判治 文蔵 家兔の結腸に関する研究、喫歯類に於ける消化管の組織解剖学的差異について 平山  
 布田 健彦 ミンクの繁殖に関する研究 平林  
 前田 肇 肥育牛の経営診断の研究 砂川  
 松村 哲 イオン交換膜を用いた電気透析法による牛乳中放射性核種の除去について 山中  
 養毛 捷二 鶏肉の保存に関する研究 鬼原  
 山田 進 養豚の糞尿処理に関する経営的研究、頭当りの限界施設費について 吉村  
 山村 廣紹 飼育野兔の生理生態に関する研究 平林

吉田 俊郎 乳量調整牛の現状とその経済性 砂川  
 吉光 康雄 鶏に於ける孵化所要時間と雌雄比との関係について 一戸  
 宇佐美 紘 鶏肉自己消化中に於ける蛋白質の变化に関する研究 鬼原  
 山田 通滋 家兔卵子の保存に関する研究 平林  
 後藤 英人 休学 (イギリス) 砂川  
 塚本 公達 育成牛保有率と酪農収益性について 砂川  
 野崎 耕助 スイス酪農に於ける一考察 (休学) 鈴木  
 Developmental Genetics on the body weight of Mouse. Differences on the relative growth coefficient between body weights and some viscera weights in F1 and F2 Hybrids and in their parent strains. 柴田  
 安藤 英典 クリーム泡立に及ぼす冷却保持時間と温度の影響 山中  
 井関 政憲 経営規模別養豚の施設設備費の採算限界 吉村  
 糸瀬 好光 鶏雛の孵化所要時間と雌雄比との関係、品種の差異による雛の発生状況について 一戸  
 市毛 達夫



中野健太郎	Hot Carriage に関する研究	鬼原
石原 弘一	水田酪農と畑作酪農の比較及びその 経済性について	砂川
三上 敏行	長欠	
竹迫 政博	乳酸菌飲料の製造に関する研究	山中
諸木 逸郎	赤カビのアミノ酸生産能について	杉村

## 東京農業大学畜産学科 "畜友会" 規定

昭和四十一年十二月六日一部改正

### 第一章 総 則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称する。
- 第二条 本会は東京農業大学在學生、教職員、および卒業生をもつて、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。
- 第二章 会 員
- 第四条 本会の会員は左記の三種をもつて組織する。
  - 一、正会員
  - 二、特別会員
  - 三、名誉会員
 正会員は東京農業大学畜産学科在學生。特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

### 第三章 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
  - 一、委員長一名 副委員長二名 書記二名 会計一名 会計補佐一名 渉外二名 企画二名
  - 二、一年クラス委員二名 二年クラス委員二名 研究室委員七名
  - 三、監査員四名
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。
  - 委員は一、二年二名、各研究室一名づつ、
  - 監査委員は各学年一名づつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならぬ。
- 第九条 役員の任期は原則として一年とする。
- 第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 第十一条 総会は正会員の三分の一以上により成立する。

第十二条

定期総会は年一回十一月に召集する。  
臨時総会は左記に該当した場合一カ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員のおよそ三分の二以上が必要と認めたとす。

第十三条 総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条 総会に於ける議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章 業 務

第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この召集は委員長が行なう。

第十八条

本会の事業年度は十二月一日より翌年十一月末日迄とする。但し会計年度は十一月一日より翌年十月末日までとする。

第十九条

本会は左記の業務を行う。  
一、会員親睦会  
二、講習会及び研究発表会  
三、見学調査  
四、機関紙の発行  
五、その他第二条に附帯する業務

第五章 会 計

第二十条 会費は年間七五〇円とする。その納入は四カ年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。

第二十一条 但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。

本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。  
寄附行為は認める。

第二十二条

納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条 決算報告は十月末日までに作成し公示する承認は定期総会において行う。

第六章 監 査

第二十四条 本会の業務の円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査を行う。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来なく。

第七章 附 則

第二十七条 本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八条 本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

## 編集後記

九月中に発刊の予定でしたが、原稿が思うように集まらなかったこともあって十月になってしまいました。

例年より以上に良き内容にと、張り切って多方面に働きかけてみた結果、今回寄せられた先生方からの多数の幅広い経験・意見・専門研究等、十分満足いただけただけなことでしょう。

又、諸学生からの詩・随想等も興味深く味わえたのではないでしょうが。

更に研究室紹介では研究室の特色があらわれており、その意味で一、二年生諸君にとって多少なりとも役立てば何よりです。

編集するにあたっては、ちょうど収穫祭の準備と重なり、役員一同、身を粉にする思いで取り組み作成した状態です。したがってうなづけない点が見当たるかもしれませんが、もし気付いたこと、アドバイスがありましたら、畜友会役員に申し出ていただきたいと思います。これからの「ふじみの」作成にあたって大いに役立てていくつもりですので、

最後に「ふじみの」に原稿を寄せて下さった諸先生諸君に感謝し、これから先も畜友会を発展させる為に積極的な参加をお願い致します。

畜友会役員一同

昭和43年10月30日発行

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1  
東京農業大学 畜友会  
電話 (420) 2131(呼)

“ふじみの” 第8号

編集責任者 熊谷隆幸 印刷所 エルデ・タイプ社  
発行者 中山精 電話 (429) 1067

